

37

376



始





の  
一  
路

大正  
4. 7. 10  
内交





## 自序

春に百花あり秋に月あり夏に涼風あり冬に雪あり、四時の光景秩序井然、古往今來一絲紊れず、是れ豈に法界の大智に非ずや。天行は健なり自彊息まず、風伯一たび來れば青天忽如として雲雷を起し、朝陽山を出づれば幽谷警爾として暗影を絶つ、是れ豈に宇宙の大意志に非ずや。百花笑を漏らし胡蝶霞に舞ひ、群芳香を放ち仙禽雲に翔り、溪聲山色我が耳目を洗ひ、松韻月影我が心腸を爽かにす、是れ豈に天地の大情に非ずや。法界の機微に觸れて以

て人智を啓發し、宇宙の玄機に接して以て人意を薰鍊し天地の妙趣を感じて以て人情を涵養す、宗教是れより出で教育是れより生ず、政治法律經濟技藝亦た皆な是れに由らざるは無し、而して其の根本を究盡して平常心に其の全體大用を實現するを禪心と稱し禪機と稱す。故に一たび禪那三昧に安住する時は、廓然として大智に通達して宇宙の實相を觀照し大道の眞源を證會し、驀然として生死の窩窟を打破し煩惱の羅籠を擲翻し、恢然として洪大の慈悲を發揮し利生の大用を現前することを得ん、是を向上の一路と稱し修證の妙諦と名く。余道業生疎百無所取、唯だ聊か古聖先徳の

嘉躅を追躡して時運の大勢に順應し、以て報恩利生の願行に資せんと欲し、或は之を舌頭に漏らし或は之を筆端に描く、幾許般の爛葛藤、看來れば泥裏に土塊を洗ふに似たり。讀者幸に余が微衷を憐れみ、貧兒の舊債を思ふことを咎めず、言外に宗趣の所在を照顧し玉は、糞掃堆中一箇の明珠を拾得するの分なきに非ざるべし。

大正四年七月

雲洞菴主 新井石禪

# 向上の一路——目次

## 上 開示の巻

- 一 正語行……………一  
精神を描寫する最好機關——濫用妄用——八正道——第一、可  
喜樂言——第二、開發言——第三、善釋難言——第四、善分析  
言——第五、善順入言——第六、引餘證言——第七、勝辯才言  
——第八、隨宗趣言——四種の口業——五種の佛語——正語の  
要は慎の一字——重宗と重昌——法を懼るゝものは輕々しく言  
はず——卍山禪師の謹言訓

- 二 退歩の工夫……………一六

向上の關振子——皆川淇園の退歩訓——積極的説明——佛智裕和尚の語——寂室堅孝禪師の一訣

三 學佛道の基礎は退歩返照にあり……………二五

入道の門闕——退歩の意義——進歩的活運

四 三相の修養……………三一

發相と進歩——寂然不動——三界は我有なり——制相と退歩——捨相と中庸——奕堂禪師の氣焰——介石の須彌山說——深呼吸

五 不自在を習ふべし……………四三

修養の基礎——苦と樂——不自在の意義——修養的人傑——東湖先生學則の骨子——慧鬼法師と貞堅の志氣——綾部弘道の節

儉——太宰春臺の識見——君子と小人との分界——太田錦城信念の表白

六 修養の三心(其二)……………五八

三心とは何ぞや——喜心の修養——六根具足——人道の捷徑——細君を忘る——開齊と會津公——憐むべき富豪の子弟——老心の修養——同情水に及ぶ

七 修養の三心(其二)……………七〇

大心の修養——一喝大砲に勝つ——砂石集——鼻下黒き美人——佛教の雅量——「ケレドモ」——三寸の舌頭

八 廻天の力……………八一

廻天の故事——蘭相如——廉頗——愛語の修養——伏藏の曲者

を退治せよ——伊木清兵衛の忠言

九 含徳の修養(其一)……………九二

含徳の意義——昨上禪師——友達の背を流す

一〇 含徳の修養(其二)……………九七

介亭先生の修養——僕八助の鮑料理——東涯先生と天水桶

一一 孝順至道(其一)……………一〇二

孝順の意義——四恩の解——忠孝一體——父母の十恩——人情の極致——哀々たる父母——反哺の孝、三枝の禮

一二 孝順至道(其二)……………一一三

孝順の仕方——身體上の孝順——元政上人——孝行酒屋——色

難し——精神上的の孝——現在一世の孝——孟子の五不孝——益軒の孝道——未來永遠の孝——宗教的大信念——孟蘭盆會と報恩

一三 孝順至道(其三)……………一二九

神武帝皇祖大神を祭り給ふ——應神天皇御妃兄媛の孝情を愛で給ふ——孝子永安安次——孝子正輔屋根に上らず——畫師浚明血を以て觀音經を寫す——妙仲の孝心——孝女たみの奮勵——妙海の常灯回向——支那に於ける孝順の事例——西洋に於ける孝順の事例——水戸黃門光圀公の精進——佛教上に録されたる孝順の因縁——孝順は人倫の大本——御勅語の要領——明治天皇の御製——明教大師の孝論——治國平天下の樞機

一四 四種の雅行……………一四四

四種の雅行を示し玉ふ——四種の雅行と三大行——父母恩重經——人倫道德の源泉——梵網經——濟世利民の行——宗教的行持——槿花一朝の露——生活の中心——六輪々轉也た風流

一五 佛教の目的(其一) . . . . . 一五三

各宗の目的——今世安穩、後生善處——八箇の條件——質直——ウツランボツの修行——精神作用——優——醇厚——堅志——同情——一視同仁——師訓——知識——信念

一六 佛教の目的(其二) . . . . . 一七〇

向上主義——親の心と佛の心——人の出世を嫉む南林——泥中の蓮華——麥香煎か米香煎か——悶えずむせざる修養

一七 戊申詔書と古禪僧(其一) . . . . . 一八四

上下一心——和合は萬行の根源——第一、克己——楊岐方會禪師の勝躅——第二、隨喜——無着の眞宗——第三、慈忍——六和敬——仙崖和尚の慈忍

一八 戊申詔書と古禪僧(其二) . . . . . 一九五

忠實服業——忠實の行持——歐陽修と一老僧の問答——大智禪師の行持——天桂禪師と德島城主——古月禪師の行持——明教禪師調心の樞機——即心丹瑞和尚の行持——志操を忠實ならしめよ

一九 戊申詔書と古禪僧(其三) . . . . . 二〇七

勤儉治産——勤儉の模範——二祖慧可——六祖大師樵採して母を養ふ——藥山禪師の平生——百丈大智禪師の支風——大梅法常禪師の勤儉——孤雲禪師の母の嚴訓——白隱禪師の勤儉



### 下 悟入の卷

二〇 禪は脚下にあり……………二二一  
 禪の所在——自己を知るにあり——所謂禪病——世尊と摩尼珠  
 ——模象と真龍——卍山和尚の語——佐藤一齋の語——禪的倫  
 理の根本——仰山との問答——遊山玩水

二二 禪の本領(其一)……………二三一  
 皆禪から生れた——禪黙——禪の目的は何か——心とは如何な  
 るものか——迷悟——苦樂——慈善——火と闇冤の譬——心と  
 時計の譬——心の本体を究めるが禪である——心の本体——冤  
 の意義——儒者安積良齋——嫁の像

二三 禪の本領(其二)……………二四八

二三 先づ静坐せよ……………二六〇  
 惡覺退治——無我無執——戒定慧の三學——禪は三學の中心——  
 六入無迹——明惠上人と松茸の御馳走——善も惡も取り去れ、  
 ——裴休と黄檗——眼横鼻直

二四 身心學道……………二七〇  
 色と心——學道とは何ぞ——因縁の力——佛道の根源——精神  
 的修養の基礎

二五 如愚を學せよ……………二七七

信仰は宗教の生命——信仰の精華——自己を究盡せよ——如愚の境界——只この正信——信仰を確立せよ

二六 莫 謔 曲……………二八六

道中の至寶——五臺山上の婆子——慕直去——承陽大師の教訓——直心是道場

二七 當願衆生……………二九六

一般修養の觀念術——佛教的公徳の修養法——千古の大教訓——出家の目的——和合の淨海——如何にして心解脱をうべきか——君子の九思——靈性の活動

二八 大正三昧……………三二三

那一物の驗證——中道一實の法——臨濟の坐睡禪——大中至

正の心——萬古の良警策——自己と他己とを放下せよ

二九 修養の第一義……………三二四

即心是佛——釋尊の候補者——自覺——精進とは何ぞ——教化の本旨——釋尊現成——徹底無我——自己を忘る——徹底自己

三〇 禪想に映じたる大聖降誕……………三三三

天上天下唯我獨尊——釋尊出世の本懐——大死一番大活現成

三一 大用現前不存規則……………三四一

趙州に箇の語なし——回光返照の退歩——慕直に靈山の枯花に觸れよ

三二 常濟大師の行持……………三四六

高祖太祖一體——忠孝の模範——師に對する孝養——總持清規

御編述——法身の舍利——宗門の二大秘寶

三三 唯有一乘法……………三五六

中峰禪師の示衆——唯一の佛法——仰山と二僧の忠告——佛心和尚と地獄天堂の有無——唯有一乘法の正當時

三四 殺活の靈機……………三六六

好箇の時節——度生の二門——冤軍の勢力——無字の公案——管公の咏懷——禪と信仰——活三昧——犀川水滸々——國家的殺人刀——七難八苦——死中に活あり

三五 禪門の安心(其一)……………三八二

安心の名義——這裏生死なし——一時の幻影——佛陀の大光明——自他法界平等利益——曹洞禪の妙所

三六 禪門の安心(其二)……………三九一

三徳の圓滿——寒巖禪師と大智和尚——南朝の忠臣菊地武時——二祖慧可の大安心——萬劫不滅の大光明

# 向上の一路

新井石禪著



精神を描  
寫する最  
好機關

上開示の巻  
正語行

思想を交換し精神を描寫するの最好機關は言語に超えたるものはな  
い。若し言語なるもの無かりせば咫尺も猶ほ千里の如くなもので、一  
人一時に其主張を幾百千人に傳へ得るものは皆な言語の賜と謂はねば

正語行

ならぬ。言語と文字とは思想通信の兩翼なりと雖とも文字畢竟言語より現はる。故に人生暫くも缺くべからざるものは言語である。言語は實に人の萬生に冠たる所以の主要なるもの、一なり、殊に國憲の保障に據りて言論の束縛を脱したる我國の言論界は、殆んど多口の阿師を以て充たされ、古來未だ曾て今日の如く商量浩浩地たるはあらず、我が禪門の如きは默に宜しうして説に宜からずと謂ふと雖ども、そは返照の工夫を護持せしむるが爲めの消息にして、決して此最好機關を停止して啞子の群に投ぜよと云ふでは無い。佛陀の廣長舌は既に大千を捲き、祖師の兩唇皮は遠く萬世を覆ふにあらずや。故に吾人は日常の應對進退の小なるより布教傳道の大に至るまで、能く此言語を應川し

濫用妄用

活用し善用し、以て大に言語三昧を打せざるべからず。  
 然るに現今一般人の言語に對する注意如何と觀するに、甚だ謹慎を缺き且つ誠實を缺き、動もすれば之を濫用し妄用するの傾がある様に思はる。凡そ大利あるものは却て大害を醸し易く、大徳あるものは却て大過を招き易し、干將莫耶の劍、利用すれば以て金鐵をも截るべく蛟龍をも伏すべし。若し妄用すれば以て己れの手足を傷け己れの兒孫を害す、金銀珠玉の寶善用すれば以て國家を潤澤し窮乏を賑濟す、若し濫用すれば志操を攪亂し誘惑を招致す。濫用は思慮の深からざるに起り、妄用は徳操の全からざるより生ず。苟も謹慎誠實を缺くとせんか、之れに依て其人格を毀傷し其信用を低落し爲めに損失を被むる

八正道

開示の巻

こと幾許なるやを知らず、慎しむべきは言語である。

佛陀は八正道を修して正覺を成じ萬徳を總持し玉うた。八正道とは一に正見二に正思惟三に正語四に正業五は正命六に正精進七に正念八に正定と云へる八種の正行である。此中正語とあるが乃ち言語の勝行である。法界次第には「無漏の智慧を以て常に口業を攝して一切虚妄不實の語を遠離す」と釋せり、瑜伽師地論には正語の標準を八種言と稱して八ヶ條に分ち示し玉うてある。

八種の正語行の第一を可喜樂言と謂ふ。是れ修證義に所謂愛語行なり、愛語とは衆生を視る時先づ慈愛の心を起し努めて親切と正直とを旨として言語するを謂ふ。必ずしも猫撫聲を發せよとはあらず、機

第一、可喜樂言

第二、開發言

に應じ境に順じて寬嚴宜しきに適すべきは勿論なるも、如何なる場合にも慈愛の念を離れざらんことを要す。縦ひ一言一句なりと親切にして且つ誠實ならば、自づから他に歡喜と快樂とを與へ、求めずして満足せしむることを得べし。禪僧には兎角粗暴野鄙の言語を放ちて得々たるものあり、是れ全く一棒一喝順言逆語の禪機を鸚鵡的に模倣するの致す所であらう。古人時に臨んで棒雨注の如く喝雷奔に似て或は佛を罵り或は祖を呵し去ることあり、是れ人をして執を脱し着を離れ應川无礙ならしめんが爲めの善巧方便にして、何れも可喜樂の言語に非ざるはないのである。第二を開發言と謂ふ。乃ち深遠なる意義を開發して聞く人をして等しく利益あらしむるの言語である。世には頗

正語行

第三、善釋難言

る饒舌にして不得要領なるあり、婦女子の言語には殊に其の弊の多きを見る、是れ亦た最も注意せねばならぬ。第三を善釋難言と謂ふ。

第四、善分析言

乃ち善く他疑難を氷釋して、自づから聞く人をして不安の念なく又努めて疑議に涉ること無からしむることである。第四を善分析言と謂ふ。乃ち善く義理を分析するの言語なり、此分析の技能なき時は正道理を開顯すること能はず、我禪門に於ては經論を講演し古則を提唱するにも餘りに概括的に過ぎて、動もすれば空理空論に流れ易い傾がある、

第五、善順入言

今日以後の人々は極力空論を避けて其説く所必ず其意旨を盡さんこと必要である。第五は善順入言である、是は聞く者をして善く佛道に順入すべきを謂ふ。縦ひ他の疑難を釋きて己れの所説を盡すことを得る

第六、引餘證言

とするも、若し單に世間の學説に順應することをのみ努めて、我が善提道に順入せしむるを忘れなば、千經萬論を巧に講得するも終に益なきに竟らん。故に吾人は平日茶話の間にも、人をして自づから佛道を信仰し且つ順入せしむるを怠りてはならぬ。第六引餘證言である。古人も「言典を該ねざるは君子の所談に非ず」と云ひし如く、尋常の言論にも努めて餘の經論若くは聖賢の書を引證して聞く者をして之を信

第七、勝辯才言

ずること彌々深からしむる様に致さねばならぬ。第七は勝辯才言である。人間は常に辭令を慣ひ且つ言論を修練して成るべく勝妙なる辯才を以て法を説て道を傳ふべし、是れ辯舌の鍛鍊布教の講習等の今日に於て益々其必要を感じる所以である。第八を隨宗趣言と言ふ。宗は宗

第八、隨宗趣言

要、趣は理趣乃ち佛法の宗要禪門の理趣である。苟も宗教家たらん者若し此宗趣に參徹せざれば、未だ布教傳道の資格を圓滿に具備したる者とは許されまじ、佛祖の所説は一句半偈盡く佛法の宗要より出で、片言隻語も亦た禪門の理趣より發す。故に口を開けば天下の則と爲り舌を弄すれば百世の範と爲る。然るに吾人未だ此宗趣を究めざれば、縱横に説き去り説き來り自在に論じ來り論じ去るも、容易に痒處に搔在せず、動もすれば當今の諱に觸れて泥裏に土塊を弄することを致す、故に吾人は常に實參實究して佛法の源泉を掬み祖道の端的を穿ち、而して能く一句半偈片言隻語も皆な能く宗趣に隨ひ去らんことを要す、是れ實に正語行の最勝至高なるものと謂ふべきである。

四種の口業

五種の佛語

古人曰く「口は是れ禍の門、舌は是れ禍の根」又曰く「多言は道を害す」又曰く「智者は言はず言ふ者は知らず」と、是等は正語に反せる邪語を誡めたものである。釋尊は受十善戒經等に於て四種の口業を制し玉へり、乃ち妄語、兩舌、惡口、綺語是れなり、更に讚歎邪見語なるものを誡められてある。梵網戒經には妄語、説過、自讚毀他、謗三寶の四箇條に分ちて邪語を制し玉へり、此外口業に關する制戒教訓は各經論に散在して、算ふるに違あらず、我が承陽高祖は無義の語無益の語雜穢の語無慚愧の語を誡め玉ふこと甚だ嚴なり。此等の邪語を離るれば正語自づから現はる。金剛經には眞語實語、如語、不異語、不誑語と云へる五種の佛語を擧げてある。眞語は眞理を宣明するの語、



正語の要  
字は慎の一

實語は實際を標示するの語、萬古不易の道を説くが故に如語と云ひ、應用して差異なき法を示すが故に不異語と云ひ、畢竟して衆生に實徳實益を與ふるが故に不誑語と云ふ、是れ亦た前の八種の正語行中に收むべきものである。之を要するに、内佛教の宗要に通じ、外衆生を慈愛するの念を蓄へなば、如何なる人と雖とも正語行を具ふることを得べし。殊に宗教家たらん者は平常の應對進退にも必ず此正語を學得するの心懸あるを肝要とす。徒らに麤暴の言を發し突飛の語を放ち又は戲論野鄙に涉るが如きあらば、其人格を失墜し其品位を汚損すること幾許なるやを知るべからず、故に正語の要は慎の一字を以て之れが根柢と爲すべきことを忘れてはならぬ。

重宗と重昌

昔し京都所司代板倉勝重辭職を願出たる時、二代將軍秀忠公は、勝重の二子重宗、重昌の内を擇びて後任と爲さんと欲し、先づ二子の才徳を驗せん爲め、假りに訴訟に關する問題を設けて之を裁決せしめた。重宗閱讀すること再三の後、公事裁判は國家の大事なり篤と勘考の上答書を呈し奉らんとて家に歸り、慎重に研究し七日を経て漸く答書を呈出した。弟の重昌才智群に超え命を受くるや即座に之を解決して直ちに答書を作製す、而して二人の裁決符節を合すが如し。然るに勝重は深く重宗の慎重を賞し却て重昌の輕卒を惡む、公亦た勝重の意に従ひ、遂に重宗を擧げて後任とした。果せる哉、重宗は絶代の偉勳を奏して百世の下人をして其才徳に感ぜしめた。而て重昌は天草の亂に將

開示の巻

軍御名代の大任を蒙りしも、輕舉遂に島原有馬城に戰死したのである。知るべし、能く慎しむ者は功を成し慎しまざる者は敗を招ぐとを。

面山和尚は其廣録中に左の如きことを辯せられぬ。

昔し六祖因に衆に告て曰く、吾に一物あり頭なく尾なく名なく字なく背なく面なし、諸人還て識るや否や。時に荷澤の神會大師、衆を出で、云く、是れ諸佛の本源神會が佛性と、祖曰く、汝に向て道ふ無名無字と、汝便ち喚て本源佛性と作す、向去把茆の頭を蓋ふあらんも、只だ知解の宗徒と成らんと、蓋し是の時青原南嶽忠國師等の若き者ありて、席を同うして示誨を聞くと雖ども、未だ叨りに供答せざる所以は、則ち法を知る者は懼るればなり云云。

法を懼るは輕し、懼るは輕く云は

知るべし、法を懼るゝ者は輕々しく言はざることを、指月和尚は十地經の意を取つて曰く

妄語を離るゝには、常に實語、諦語、時語を作す、是れ菩薩は乃至夢中にも覆見妄見を起さず、誑他語を作さんと欲するに心なし。何に況や妄語をや、兩舌を離れて破壊心なし恐怖心にあらず惱亂心にあらず、此に聞て彼に向て説かず此を壞するが故に、彼に聞て此に向て語らず彼を壞するが故に同意の者を破らず、若くは實不實、人をして別離せしめず、又惡口の所有語言を離る、謂く侵惱語、麤獷語、苦他語、令他瞋恨語、鄙惡語、不愛語等の諸有の惡語、皆悉く捨離す、所有の語言美妙にして耳を悦ばしむ、謂く潤益語、軟語、

順理語等の一切愛敬の語常に樂うて之を説く、又綺語を離る、常善  
思語、法語、毘尼語、道語、籌量語等、是れ菩薩は戯笑にも尙ほ綺  
語せず云云。

如何に貴とく有り難き教訓ではないか、今日の人其佛徒たる者にさへ、  
動もすれば釋尊を指して彼がくくと稱し、祖師を呼ぶにも彼れ達磨、  
彼れ道元、彼れ法然、彼れ日蓮等と稱して、些の敬意だも存せざるもの  
あり、甚だ慨歎に堪へざる次第である。縦ひ基督、孔子を呼ぶにも必ず  
相當の敬語を以てすべきは自己の徳行である。如何なる場合に於ても  
人を稱するに器物を取扱ふが如くにしてはならぬ。況や同一佛教中に  
於てさも憎々しく相謗り相罵るが如きは、恰も一家内に於て親子兄弟

交々惡言を放つにも似て醜の極みである。古の高僧の破邪的斷片的な  
る言語を借り來つて、濫りに口眞似をするが如きは、偶ま以て自家の  
價聲を落すに過ぎぬ。佐藤一齋翁曰く、好みて大言を爲す者あり其人  
必ず小量、好みて壯言する者あり其人必ず怯懦、言語大ならず壯な  
らず、中含有するある者、多くは是れ識量弘恢の人物なりと。吾人は  
切に諸君と與に其口を守り其舌を慎しみ、以て大に正語行を學せざる  
べからず、左に卍山禪師の謹言訓を掲げて結文に代ふることしやう。  
言出見其心、心言要相應、未レ有言之邪、而能心獨正、支離亂ニ  
是非、孟浪少ニ忠信、慎ニ發於樞機、固ニ根於徳性、白圭尙可レ磨、其  
是之爲レ鏡。

二 退歩の工夫

退歩の工夫とは、自己を以て自己を警しめ、自己を以て自己を導き、自己を以て自己を勵まし、自己を以て自己を轉ずることである。所謂、丙子童子來求火なり、照顧脚跟下なり。此工夫なかりせば、進歩も眞の進歩たる能はず、向上も眞の向上たる能はず、退歩は實に是れ進歩の好伴侶、向上の關振子なりと參究せざるべからず。

吾人は何が爲めに學業を修むるや、吾人は何の目的を以て佛弟子と爲りしや、日々の行持は如何にせば自己の天職を完うすることを得べきや、平素の言行は如何にせば佛祖の恩德に酬い奉ることを得べき

向上の關振子

や、斯く造次顛沛の間にも暫時の油斷なく回光返照し去る時は、一點英靈の氣忽然として通身に充ち満ちて、行住坐臥、自から其の道を履み其の徳を明らかにするものであります。

近頃皆川淇園の五堪忍といへる一文を見しに、日常卑近の上に就て堪忍の心得を示したものである。是れ亦た一種の退歩訓なり、乃ち左の如し。

皆川淇園の退歩訓

- 一 五堪忍といふことあり、聖賢の旨趣より出で、世業を爲すの基、人間安穩の大悟にして、修身齊家の樞機なり、之を守るときは勞する事なく、家富み榮え、これを守らざる時は亡ぶ。
- 一 衣服は何の爲めにか着る、寒さを凌ぎ暑をいとはんが爲めなり、

さすれば、寒からず暑からず着ば、麤服にても厭ふことあるべからず、美服に奢るはいまだ寒暑の身にしまざるが故なり、寒暑の身にしみなば、薙にてもいとふものあるべからず。

一 食事は何の爲めにかする、空腹をやめんがためなり、さあらば添物はなくてたりなん、添物なくて食の進まざるは、いまだ飢の至らざるなり、飢の至るときは、糟糠をだも嫌はず。

一 家は何の爲めにか作れる、雨露をいとはんが爲めなり、さあらば無益の造作などなさてたりなん、水火の災に家を失は、人の軒端にても厭ふものあるべからず。

一 妻は何の爲めにか持てる、子孫を嗣がんが爲めなり、さあらば

子孫あるものは、妾などもたてあるべし、妻子あるが上に妾を持つは色に溺るゝが故なり。

一 財は何の爲めにか求むる、世計の第一衣食を足らしめんが爲めなり、さあらば義をかき耻を忘れて貪り貯ふるにも及ぶまじきことにこそ。

積極的説

是れ本より消極的に堪忍の心得を説いたものである。積極的に論ずれば、衣服は必ずしも寒暑を凌ぐ爲めのみに非ず、乃至、資財は必ずしも世計を足らしむるが爲めのみに非ず、衣服は以て禮を整へ美を調ふべく、食事は以て生を守り神を養ふべく、家屋は以て身を安んじ職を務むべく、妻室は以て家を理し情を樂しましむべく、資財は以て業

を興し國を富すべし、然れども兎角人間は、私情に覆はれ妄惑に礙へられて、動もすれば全然其目的に辜負する様な行動に出でたがつてならぬものである。故に衣服の爲めに却て禮を亂し美を傷つけ、食事の爲めに却て生を損し神を害し、家屋の爲めに却て身を苦しめ職を廢し、妻室の爲めに却て家を破り樂しみを失なひ、資財の爲めに却て業を忘れ國を賣る様な者を生ずることゝもなる。是れ人心の嚮ふ處、或は過ぎたるに失し、或は及ばざるに失して遂に其中和を得ること能はざるが爲めに、是の如き忌まはしい事にも立ち至るのである。故に吾人は、一枚の衣服を製するにも、自己の分限を顧みて必要か不必要かを檢別する様に致し、一棟の家屋を建るにも、自分の地位を省みて適當か不

適當かを觀察する様に致し、其外萬事萬端に就て、能々自己の脚跟下を照顧する様にせねばならぬ。是れ則ち退歩の工夫である。

いか程立派な學者になりしとて、學者の本分は如何と返照して常に其立脚地に安住するに非ざれば、眞の學者とは稱し難し。如何なる大宗教であればとて、宗教家の天職は如何と省察して常に其立脚地に安住するに非ざれば、眞の宗教家とは申されぬ。氣を逐ひ香を尋ね外に向つて妄りに食ほり求めんとす、是れ人心の常なり、此人心こそ動もすれば五根を牽て罪惡の門に入らしめ、國家を毒して垢濁の坑に陥いらしめ、終には無量却來死生の根本と爲る。古人は之を「心猿飛び移る五慾の枝、意馬馳走す六塵の境」というて歎かれてある。佛智裕和

尙の語に曰く。

駿馬の奔逸なる、而も敢て足を肆まゝにせざるは、御轡の禦なり、  
小人の強横なる、敢て情を縦まゝにせざるは、刑法の制なり、意識  
の流浪する、敢て縁を攀ぢざるは、覺照の力なり、嗚呼、學者にし  
て覺照なきは、猶ほ駿馬の御轡なく小人の刑法なきが如し、將た何  
を以てか貪慾を絶ち妄想を治めんや。

學者は道に精しく、智者は理に達す、而して往々道に背き理に悖る  
の言行を敢てする者あり、是れ智以て情を調ふること能はず、情以て  
意を制すること能はざるが爲めである。口に法華を誦するも心に法華  
を念することを忘れ、心に法華を念するも、身に法華を轉ずることを

忘るゝが如きは、共に法華を知る者と謂ふべからず、是を以て我が高  
祖は心身學道と説き、日蓮上人は身讀といふことを示されてある。心  
身を擧げて道を學び身を以て經を讀むの人たらざれば、眞の佛弟子と  
は言はれぬ、眞の佛敎信者とも稱せられぬ。今の世に眞の佛弟子眞の  
佛敎信者たる者果して幾人かある、曉天の星よりも猶ほ稀れなるべし。  
是れ皆な退歩の工夫を等閑にするが爲めであらうと思ふ。

釋尊入涅槃の時、諸の弟子を誡めて、汝等は何故に剃髮染衣して佛  
門に投ぜしかといふことを忘れざれとて、左の如く仰せられた。  
汝等比丘、當さに自ら頭を摩づべし、以て飾好を棄て壞色の衣を著  
し、應器を執持して乞を以て自活す、自ら見るに是の如し、若し橋

慢を増長するは尙ほ世俗白衣の宜しき所に非ず、何かに況んや出家入道の人、解脱の爲めの故に自ら其身を降して而かも乞を行するをや。

寂室堅孝禪師も亦た其弟子に向つて、我に緊要の一訣あり、此一訣こそ行佛道の基礎とも謂ふべし、然れども稽古慕道の士に非ざれば、容易に之を示さず、其一訣とは何ぞや、汝等毎朝洗面の後自ら其頭を摩で、あ、我こそは塵世の恩愛を離れて聖衆の列に入りたる者なり、何の暇ありてか我見我慢の諍を起すべけんやと思せよ、又自ら其袈裟を顧みて、あ、我こそは解脱の服を披し福川の衣を纏ふ。若し妄念を盡すこと能はず、利生を事とする無かりせば、何の面目ありて佛祖

に見ゆべけんやと觀察せよ。此思惟觀察をして相續不斷ならしめば、佛法自から通身に備はり菩提自から脚下に通ずべしと示されました。至道は高尚幽遠なりと雖ども、之を實踐することは吾人の第一歩に在り、其第一歩に點着することを退歩の工夫と謂ふのである。尤も七尺單前三昧に安住する端的は、別に一段の眞訣ありと雖ども、平生心是道に參來參去せんと要せば、先づ以て此退歩の工夫を磨勵して、自己を以て自己を警誠し開導し策勵し活轉せねばならぬ、然らざれば大道の我に於ける、相去ること十萬八千ならん。

### 三 學佛道の基礎は退歩返照にあり

學佛道の基礎は退歩返照にあり



入道の門

開國進歩を以て國是と稱するの今日に當り、進歩開發を以て百度施設の方針と爲すの時代に當り、如何に佛祖の家訓なればとて、退歩承當を以て學佛道の基礎と斷定するは、餘りに時勢に背馳するものと思考する人々もあらう。开は我が所謂退歩承當の眞意義を解釋せぬ所より出たる謬見である。承陽大師は普勸坐禪儀に於て「回光返照の退歩を學すべし」と仰せられたるは、決して坐禪の上の用心のみではない。佛敎に説く所の三千の威儀、八萬の細行、聲聞の四諦、菩薩の六度其他一切一行持、一切の觀行、一切の佛事、一切の法門も皆な此退歩を以て入道の門闢とせねばならぬ。

果して然らば退歩とは抑も如何なる義なるやと云ふに、即ち省察の

退歩の意義

意味である、工夫の意味である、推理の意味である。世の道德を實踐し倫理を躬行せんと欲する者も、若し内に省察の力を有せざりせば決して其目的を達することは出来ぬ。又た世の美術に熱中し工藝を策振せんと欲する者も、若し内に工夫の力を有せざりせば、必ずや其技倆を進むることは出来ぬ。又た世の哲理を研鑽し學術を發達せんと欲する者も、若し内に推理の力を有せざりせば、遂にその知能を完うするとは出来ぬ。故に知識も道德も技藝も教育も、此退歩的基礎の上に成立せなんだならば、恰も空中の樓閣、沙上の宮殿と一般で、畢竟眞善美の域に達することは不可能である。故に佛敎に於て常に人をして専ら世の果敢なく身命の無常なることを觀念せしめ、自然と一切執着の

學佛道の基礎は退歩返照にあり

繫縛を脱せしむるは、決して人の心を沈め人の智能を閉づるのでは無い、何となれば、無常を觀すること深ければ、吾我の見も自から消し名利の念も自から滅する様になる。吾我名利の妄念茲に消滅すれば、此の時こそ、公明正大の氣油然而して胸間に發し溢れて天地に充塞し、因て以て太知見を開き大神通を現するに至るのである。又た一切の諸法は畢竟空にして無自性である。一塵一法も實體の認へべき者は無いと觀念せしむるは、如何にも高尚の哲理にのみ拘泥して活世界の活事業には、甚だ迂遠な様であるが決して左様ではない。大丈夫の大活眼より見れば、諸法差別の幻相も、社會萬般の状態も固執はせぬ、畢竟見來れば無自性にして畢竟空である。假令耳に絲竹管絃の聲を聞き眼に

青黄赤白の色を視るも、其の精神は泰山の如くにして寸毫も動着せぬ。故に宇宙の間に卓立し天上天下に唯我獨尊として能く萬法を以て自己の家珍と爲し三界を以て自己の領土と爲し、而して自己も亦た執せぬのである。この時に至つて、承陽大師の詠せられたる「溪の響嶺に鳴く猿たえなく」にたゞ此の經を説とこそきけ」といふ風流も占めらるゝのである。されば無常と觀じ畢竟空と證する、是れ回光返照の退歩的研究なるも、その退歩的研究が取りも直さず、進歩的活運を起すのである。退歩すること愈々深ければ進歩すること益々著しいのである。これを大死一番大活現成と申すのです。然るに今の學問をする人の中には、動もすれば外界にのみ心志を馳せて、徒らに名を貪り

學佛道の基礎は退歩返照にあり

利を求め世に阿ねり人に媚び、遂に學者たるの識見も理想も無く、一生區々として權門富家の奴隸と爲る者がある。又道徳を論じ慈善を行ふ人の中には往々其の根本の立脚地を失ひ唯だ無暗に表面を装ひ世間を飾り、道徳を種にして衣食の便りに供したり慈善の名を假りて名譽を買収するの道具と爲したりする様な者も少なからぬ様である。其の他政治家でも教育家でも、悪くすると此種の連中に加盟する者がある、國家の爲めに甚だ悲しむべきことである。承陽大師が「誰とても口かけの駒はきはぬを法の道うる人ぞ少なき」と御歎き遊ばされたことを想像すれば、退歩返照の術に味きは、人生古今の通患と見えます。故に眞實に佛道を學ばん人は退歩返照を以て入道の基礎と爲し、夙夜

に之を忘れざらんこと肝要なり。否な獨り佛法のみならず、人生萬般の行業皆な退歩返照の基礎を失墜せざらんことを希望致します。尙次ぎの三相の修養に於て退歩返照の意を深く會得せらるゝならん。

#### 四 三相の修養

佛教に瑜伽師地論と申す書があります、その中に三相といふことを説てある、即ち發相、制相、捨相が是である。

發相とは通俗の語では進歩と申す語で、教育勅語の中に「智能を啓發し德器を成就し」とある啓發に當ります、吾々の智能も磨けば磨く程光りを増し、修養も積めば積む程人格が大きくなる、此の進歩、啓

發が發相の事でありませう。

釋尊が如意足(自由)を御説きになる中に四つある、其一は欲を起せとある、之は一寸見ると佛教でよくいふ無慾の反對のやうであるがさうではない。勿論慾と云うても自分一己の慾ではなくて、社會、國家、人道天道の爲に大なる活動力を以て大なる慾を果たす道である。實業家が骨折るのも、教育家が力をつくすのも、宗教家が布教するのも、之皆大なる慾の力である。要するに大慾精進の力がなければ、世の中は退歩するに相違ないから、瑜伽師地論には先づ第一に進歩的發相を説かれたのである。

頂きに鵠の巢やすくふらん

眉にかゝれるさゝがにの糸

釋尊雪山の中に吾を忘れて深く禪定に入り、其様さながら枯木の如くであられた。所が鵠といふ鳥がやつて来て之はいかにもよい處だといふので、枯草や芝土の類を運んで来て巢を作つた。丁度ストーブの上へ巢をかけたやうなものあるから鳥には餘程工合がよかつたらしい。其中に釋尊は觀法をおやめになり定から出でられた。かく申すと何か私を作り話をするやうに聞えますが、印度では古代から坐禪觀法のやうな事がありまして、釋尊は長らくこの方面には御研究遊ばされたからして枯木の如く、寂然不動、禪定に入られたのは勿論作り話ではない。さて只今釋尊定より出でられたが、どうやら頭がへんだ、

寂然不動

三相の修養

ハハア鳥が巢をくうて居る、是が吾々なら鼻先へ一疋の蚊がとまつて  
 さへ忽ち平手をあけて粉碎するのであります、有りがたいかな、釋  
 尊はあゝこの鵠も亦生物の一つ、むやみに頭をふれば生物の命を奪  
 ふことになる、と仰せられて、暫くそのまゝの態度を保たれたのである。  
 釋尊の御慈悲の廣大なることは、是れでも覗ふことができません。宇宙  
 間の大哲學を御説きになつても衆生凡夫を理窟せめにはなされない、  
 常に御慈悲の教を垂れ玉ふのである。今頭を横に一つ、縦に一つ振つ  
 たなら、あはれ鵠の別荘は微塵粉碎せられるのであらうと鵠を憐む  
 こと一に子の如くに思召された。  
 「今この三界は皆我有なり、其中の衆生は皆我子なり」

と仰せられた。今もし人が實業に従事して活動する場合には、南は  
 臺灣の果てから、北は樺太までも皆之れ實業の領土である。

光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、  
 宗教家の活動も其領土が十方世界に亘る程でなければならぬ。さ、  
 がには蜘蛛の事で、三日、風が吹かぬと世界は蜘蛛の巣だらけになる  
 と云ふ程であらから、釋尊の入定せられたそのお面の眉を中心として、  
 べつたり巢をかけたといふことである。畢竟するに、この入定は實に  
 進歩發相の根元であつたのであります。吾人もこの釋尊の進歩發相の  
 根元に倣つて、この一大修爲の工夫を致さねばならぬ。  
 次に制相とは發相の裏になるもので、之れが即ち退歩の工夫に相當

するのである。大欲精進、進んで止まざるといふは、いかにも元氣横溢して結構なことであるが、餘り無茶苦茶に進んで足もとを氣をつけぬと、間違ひを起します。

男子立志出郷關はよいが、東京の市中で教育家や警察官や宗教家が心配するのは何であるか、青年學生、血氣にまかせて前後の分別なく、やり出して種々様々の失敗を演ずるではないか、かうして居ても心は地獄にも行き、餓鬼にも通じて居る、日々夜々社會の出來事は多く地獄修羅の沙汰ではなからうか、是が一番退歩の工夫を要するので禪學の入門である、坐禪の戸口である。或る雜誌にかういふことが出て居つた、一人の男が世間で坐禪が流行するので自分もまねをしてみた。

七日もやつたが、一向つまらない、まよよ、よさうかと思ふつたが、今一日辛抱してやつたが、何か得る所があつたと見えて切りに喜び顔であるので、ほかの人が、何か悟るところがありましたかと尋ねると、其男は、外の事でもないが、丁度今から三年前に無證文で金を借した事を思ひ出したという相です。何んと精神の顛倒も亦甚たしいではないか、兎角吾々の心は、何時どこへ飛んで行くかもしれぬ、坐して居ながら地獄にも行けば餓鬼へも走る、心とは、コロくと、ころがるから名づけたものらしい。例へば、トロくするから「とろろ」クルくまはるから車といふやうなもので心は始終玉の如くころがつて居る。

心こそ心まどはす心なれ。

心のこまに手綱ゆるすな

百萬兩の黄金を前に積み上げて身動きもせぬ、權勢威光で劫かしても、びくともせぬ、所謂富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる底の大丈夫の心になつたなら、四海浪穩かにして龍の眠り細か也、之れが、即退歩の工夫たる制相である。兎角人は足もとに氣のつかぬ者で進歩と云うても眞の進歩は必らずこの制相を要するので、制相なき發相、退歩の考なき進歩は是れ砂上に立てたる、大厦高樓、土臺が堅固ならねば、それ岌々乎として、殆きものではあるまいか。即ち退歩は進歩の母、制相は發相の根本であります。

吾人は以上の修養が出来たならば次に捨相の工夫を致さねばなりません。せぬ。

斯の如く進歩の中にも退歩を工夫し、退歩の中には進歩を忘れぬやうに漸次工夫を積み修養を重ねて参りますと、遂に進むにもあらず、退くにもあらず、丁度よい工合になる、之が即ち中庸の點で、中道實相とも云ふ、この境界を稱して、捨相と申すのであります。味噌臭きは上味噌にあらず、學問も、學問を鼻にぶら下げるやうでは未だ學問臭きを脱しない、宗教上では我慢を離れ、我執を捨てた所に味がある。天國を飾るは赤子なりと耶蘇も説いた、支那人は、赤子の心是天眞とほめて居る。少しも人爲的のあとがなく、天然自然の理に契ふに至つ

たのが捨相である。勿論五尺六尺の太の男が赤子になるのは、手品の外はできないが、之の眞は精神上の事であるから、腹の中がいかにも、和氣霽然たるに至るを示したものである。

奕堂禪師の氣焔

奕堂禪師は、有名な方であるが、私は十六七の時分禪師のお側に居つた、随分口のお悪い方で、朝は二時頃から起される、頑是のない時分ですからつひ居眠をする、大喝一聲、となりつけられ、生れがたき人身に生れ、値ひ難き佛法に値ひ乍ら、少しの修行ができぬとは以ての外、そんな奴はぶちのめし叩き殺しても差支はない、衣をつけて、ごろく居寝りする所は、西瓜畑へ行つた様だなど、いたく叱られた事もありません。明治佛教界の奇才佐田介石先生、この方は諸君も御存じであ

介石の須彌山説

らう、佛教須彌山説を固く取つて盛にその名論奇説を振りまはした。一日須彌山の地圖模型を持参して奕堂禪師に面會をした所、禪師は忽ち、先づこの須彌山をぶちこはさなければ佛教は盛んにならぬと、どなりつけられたと云ふ事である。流石の介石先生もびつくりなされた事であらう。後日介石先生が人に對して、自分が日本で師匠と仰ぐのは、たつた三人しかない、一人は増上寺の行誡上人、一人は淺草傳法院の阿闍梨、今一人は自分が頭ごなしに叱られた奕堂禪師であると云はれた相である。私もしかられた當時は、随分恐ろしかったのですが、今日から考がへて見ますと、「にくうては叩かぬものぞ雪の竹」で叱かつたは、憎いからでなくて、實は、私のやうな愚か物をどうか一人前



にしてやりたいの爲を思うて吐つて下されたのであると思ふと、何も云ふに云はれぬ感謝の念が迷るのであります。

近頃ある雑誌に、女學生の歩き方が始終うはくして居て、一向落つきがないが、ある女學校の生徒丈は何となく、しつとりと落ち付きがあるが、尋ねて見ると、その學校では、深呼吸を生徒に勵行するとの事であつた、と書いてある。この深呼吸も坐禪の初歩の一法でありまして唯深呼吸だけでも、餘程身體に好結果を現はすものであります。坐禪と申して特別に大じかけと多くの時間を、つぶすにも及ばない。寢る前蒲團の前に靜坐して、深呼吸をなし、しつかり腹に力を入れて、今日一日の所業に缺點はなかつたか、あつたとすれば、今後はかく注意

深呼吸

せねばならぬと、一日の進歩的行動に對して退いて其行動の可否、是非を思考し、批評するが如きは是亦一の退歩の工夫であります。かくて進まんと欲せずして進み、退かんと欲せずして退くの境に至れば其人格が大きくなつて參るのであります。さて、この進歩に對する退歩、發相に對する、制相を心がけて、工夫し行くことは、吾人が修養上尤も大切なることであります。

五 不自在を習ふべし

吾人修養の第一は不自在を習ふに在り。人間の欲望といふものは兎角に偏僻に陥り易いものである。故に徒らに其食を玉にせんことを

不自在を習ふべし

修養の基礎

望み、其衣を錦にせんことを望み、其室を華にせんことを望み、其名を望み、其利を望み、其安逸を望み、其獨樂を望み、一生區々として欲望の奴隸と爲り去らんとす、此欲望を裁制して中正に歸せしむるが、修養の基礎である。裁制するの道は、不在の稽古をするに在り。說郛中に田子の佳言を載せて人欲を誡めてある。其文は左の如し、

田子、見ニ玉食ニ感然曰、弗レ饑斯可矣、見ニ錦衣ニ顰然曰、弗レ寒斯可矣、見ニ華屋ニ愀然曰、弗レ露斯可矣、母玉ニ爾食ニ而玉ニ爾儀ニ母錦ニ爾衣ニ而錦ニ爾心ニ母華ニ爾屋ニ而華ニ爾德ニ惟儀之玉以振ニ天下ニ惟心之錦以文ニ天下ニ惟德之華以覆ニ天下ニ故君子去レ彼取レ此、爾の身儀を玉にせば天下の模範とも爲りぬべし、爾の精神を錦にせ

苦と樂

ば天下の莊嚴とも爲りぬべし、爾の道徳を華にせば天下の光彩とも爲りぬべし、衣食住は處世上必須の物たりと雖も、徒らに外觀の美を好て、脚跟下に大事あることを忘却せば、本末輕重を誤るの甚しきものと謂ふべきである。衣食住は末にして輕し、身心徳は本にして重し、此本を養ひ重きを先にするの道が乃ち修養の根本義である。左に掲ぐる所は阿含經中の佛説です。

生聞梵志、佛に問うて言く、在家と出家は何を以て苦と爲す、佛の言く、在家は不在を以て苦と爲す、謂ゆる錢寶穀畜奴婢增長せざれば此に因て憂愁す、不在の故に苦なり。出家は自在を以ての故に苦なり、謂ゆる貪欲瞋恚愚痴に隨順して禁戒を守らず、此に因て愁

不在を習ふべし

感ず、故に自在の故に苦なり。又問ふ、二人何を以て樂と爲す、佛の言く、在家は自在を以て樂と爲す、謂ゆる錢寶穀畜奴婢增長す、此に因て歡喜す、自在の故に樂なり。出家は不自在を以て樂と爲す、謂ゆる道を學んで貪欲瞋恚の行に隨はず、佛の所制に隨つて、鬪諍怨憎憂苦なし、義利あるが故に不自在を以て樂と爲す。

出家は道を行ふを以て分とす、在家は守る所を知らず、故に出家在家を對比して仰せられたり。今日では本より出家在家を擇ばず、等く徳に志し道を行はんことを希はざるべからざるを以て、此文に出家とあるは、總じて修養に志す者に對しての聖訓なりと心得べし。苟も修養に志ざさん者は、必ず不自在を以て樂しむと爲すの覺悟なかるべか

不自在の  
意義

修養的  
人傑

らず、不自在とは自己の欲望を制して進止動靜常に一定の軌道を踐み、  
確然として守る所あるを曰ふなり。禮義、謙讓、勉強、儉約等は人間  
として必要缺くべからざるの徳である、然れども之を實行する時は、  
自づから不自在を感じることを免れぬ。寝たい時も寝られず、行きたい  
處へも行かれず、使ひたい金も使はぬ様辛抱せざるべからず、故に不  
自在の稽古の第一は堪忍を守るに在り、徳川家康公は流石に修養的人  
傑である。左の文は誰れしも知つての通り、公の遺訓として世に傳は  
る所とす、

人の一生は、重荷を負て遠き道を行くが如し、いそぐべからず、不  
自由を常と思へば不足なし、心に望おこらば困窮したる時を思ひ出  
不自在を習ふべし

すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝つことばかり知つてまくることを知らざれば、害其身にいたる、己れを責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

右は如何にも消極的訓誨なれども決して然らず、修養の趣味は寧ろ此處に存するのである。或人は、宗教家杯が頻りに修養を説くは甚だ宜くない、人間には皆な夫々の特所長所がある、その特長の發達したのが、英雄豪傑志士仁人等である。然るに矢鱈に杓子定規の修養論を主張して、萬人を一律の下に曳き附けんとするは、偶ま以て其性情を傷害し其特長を抑壓し、遂に有爲の人材を養成すること無きに至らんというて心配して居る様である。一應尤も千萬なる説の如くなるも、

吾人の所謂修養なるものは、決して人間の特性を傷けて其の才能の發達を沮害するが如き窮屈なるものに非ず、修養は夫れ猶ほ體育の如し、身體の健全は一切活動の基礎なり、文人たると武人たるとを問はず、男子と女人とを擇ばず、等しく體育を奨励せねばならぬ。

十人十色の特長ありて、各々其稟性の能力を發揮すべきは勿論なるが、何れにしても健全なる體力に待ざるべからざるは一なり、藤田東湖先生は曾て左の一語を以て弘道館學則の骨子とせられた。

徵古稽今 發明明神聖之大道 右文尙武 鼓舞天地之正氣

此一語は以て修養の標準とも爲すべし天地の正氣を鼓舞すればこそ、眞の英雄豪傑とも爲りぬべし、神聖の大道を發明すればこそ、眞

不自在を習ふべし

の志士仁人とも爲りぬべし、若し然らずんば、英雄は是れ姦賊、志士は便ち狂士たらん。而して正氣を養ひ大道に向ふには、先づ以て自在を忍び且つ樂しむの人たらざるべからず、自在を不自在として努めて之を忍ぶは修養の初歩なり、不自在の不自在なることを忘れ安んじて之を樂しむは、修養の優なるものである。

高僧傳を按ずるに、釋の慧鬼法師は、晉の隆安年中に彼の有名なる法顯と與に入竺した人である。戒行衆に超えて澄潔、多くは山谷に處して禪を修しき。或時、一の無頭鬼ありて面前に現はる。鬼神色自若、徐ろに鬼に謂つて曰く、汝既に頭なし便ち頭痛の患なからん一に何ぞ快なるやと、鬼忽ち形を隠す。又一鬼あり腹なくして但だ手足のみあ

り、鬼又曰く、汝既に腹なし便ち五臓の患なからん一に何ぞ樂しきやと、其鬼も亦た忽ちにして形を隠せりとある。或日天甚だ寒く雪さへ降りしきりける時、一女子の形貌端正、姿媚柔雅なるが來りて寄宿を求め、妾は天女なり上人の徳を慕ひ天主の命を承け來りて上人を慰さむといひて、艶言以て鬼の意を動かさんとした。鬼志を執ること貞確、一心牢として擾ること無し、乃ち女に謂て曰く、吾が心死灰の如く革囊を以て試むるとも何んか有らんと時に彼の女は忽ち雲を凌いで逝きつゝ願みて賛歎して、海水は竭くべくとも、彼の上人は志を棄ること貞堅なりと申したとある。向上より觀來らば慧鬼は僅かに唯一隻眼を具するのみにして、未だ燒菴婆子の瞞肝を免かれざるやは知らざるも、

不自在を習ふべし

吾人は先づ是の如き貞堅の志氣を操持したきものである。且つ此因縁も單に昔し話とのみ思ふべからず、今の世にも頭腦の無い無感覺無常識の鬼は澤山ある。手足丈は利口らしく働けども、表面のみを粧うて腹の無い連中も決して少なく無い。吾人はウツカリすると此等の輩に誘惑せられて、遂には良心までも失却するに至る。まして天女の軟言に欺かれて一生を過まる者亦た甚だ多きにあらずや、故に慧鬼の如きは修養の成功者中に列すべき人であらうと思ふのである。豊後杵築の藩士にして有名なりし綾部弘道は、身持極めて節儉にして華飾を好まざりき。ある人が其子に美服を贈りしことありしも、遂に着用することをお許さずして、「先君(父を指す)貧素にして身まかり給へり、吾も辛勤

多年幸ひに俸資を享けて兒女を暖飽せしむ、是れ君の恵なり、夫れ人情は儉に難くして奢に流れ易し、予兒を愛せざるに非ず、奢りに習はしめざるのみ」というて戒しめたとある。又碩儒太宰春臺は吹笛を能せり。日光明主甚だ音律を好み玉ひ、春臺の技を聞て懇ろに召されけるが、春臺は固く辭して「臣は道を講ずるの儒者なり、薄技を奏し宴樂に供することは能せず、若し強ひて召さば吾れ我が笛を破らんのみ」と答へ、是より終身また笛を吹かれななだ。是れ皆な不自在の稽古を積んだ例證である。聖賢の至道を以て私己の欲望を制するに非ずんば、争でか眞實の人たることを得んや、欲望の手前から見れば甚しき不自在なるも、道といふ方面より見れば此不自在こそ大なる満足である

不自在を習ふべし

る。大なる自由である、孟子が

魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚取熊掌

也、生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而

取義也、生亦我所欲、所欲有甚於生者、故不爲苟得也、

死亦我所惡、所惡有甚於死者、故患有不辭也、

といひし如く、生を捨つるは不在の極點なるも義を取ることを得た

るは、最大の満足と言はねばならぬ。君子と小人との分界、佛陀と凡

夫との岐路は、全く此間に存するのである。併しながら不在を樂し

むといふことは、我慢の力では出来ぬ、唯だ信念を有するのみありて

之を能くするのである。信念ある人は自づから、神聖の大道を尊び

君子と小人の分界

天地の正氣を養ふことを得なければなり、然らざれば徒らに法を外界  
にのみ取らんと欲し、道を心外にのみ尋ねんと欲するに依りて、畢竟  
して誠意正心の人たることは出来得ない。康節邵の詩にも、

天聽寂無音、蒼蒼何所尋、非高亦非遠、都只在人心、人生心

一念、天地悉皆知、善惡若無報、乾坤必有私、

とあるが、是れ亦た信念所發の曲調である、太田錦城も亦た左の如く

其信念を表白して居る。

放蕩淫縱の心には神もやどり玉はず、權謀を肆にし詐力を奮つて、

功利にのみ外馳する心にも神はやどり玉はず、唯菜根を咬て寒苦を

忍び、本心に復して君父の恩を思ひ、天地鬼神の冥鑒に背かざる事

不自在を習ふべし

太田錦城  
信念の表

を思ふ心には、神とまり玉ふべし、此に止りて萬事處置せば、事皆其至當を得べし、左傳にも心不爽昏三亂百度と云へるは尤の事なり、今の人精神昏亂にして書を読み道を講じ、又は政事に處置す、百事の紛亂する事尤のことなりと知るべし。

左すれば、吾人にして實に能く修養の功を奏せんと思はゞ、胸中に一點不昧の信念を發得し、誠意正心を以て萬事萬行の源泉と爲し、而して物に接し事に當りては、妄情を制し私慾を防ぎ驕奢を遠ざけ淫蕩を斥け、唯だ一心に不自在を忍び不自在を習はんことを心懸け、日に修し月に養ひ、終には不自在の不自在なることを忘れ、自在中に在りて自在満足を楽しみ得るといふ境界まで、修行の歩武を進めねば

ならぬ。予も常に不自在を習ふと雖ども、動もすれば不自在を嫌厭するの情を起し、之を忍ぶこと能はずして、知らずく不自在に辜負し去らんとし、容易に自在界の主人公たる能はざるは、甚だ慚愧の至りであるが、猶ほ勉めて自在裡に優游自適せんことを祈つて居る。冀くは同感の諸兄弟、決して不自在を惡む勿れ、自在を厭ふ勿れ、自在を視ること我子の如くなるべし、自在を護ること我が眼睛の如くなるべし、斯くする時は自づから、布施、持戒、忍辱、精進、其他所有善行淨業を發起し、世間をも利益し出世間をも潤澤し、通身盡く光明聚と爲りて、自在三昧の妙樂を廣宣流布し去ることあらん。



六 修養の三心（其一）

三心とは何ぞや

三心とは佛教聖典中に屢見る所の文字にして、其宗派經典の異なるに從て其名相こそ異なれ、其意味合は略ほ大同小異なり、淨土宗に在りては此の三心を、第一至誠心、第二深心、第三回向發願心と立て、極樂往生に缺くべからざる觀念となし、大乘起信論には、第一直心、第二深心、第三大悲心とあり、翻譯名義集には、第一大智心、第二大悲心、第三大願心と立てありますが、今茲に予が述べんとする三心は其等とは其所依を異にする、曹洞宗の御開山永平道元禪師が御説き遊ばされた、即ち喜心、老心、大心の此三心であります。

喜心の修養

喜心とは即ち喜びの心、今日吾々御互ひの境界を喜び勇みて暮らして行かねばならぬと云ふことであるが、然し社會の一面は誠に罪惡の巷にして、悲嘆の谷なりと説示するのが佛教一部の教訓なれど、それは罪惡を惡み老病生死を厭ふので、此現實世界を厭ひ活社會を厭ふのではない。由來佛教には折伏攝取の二門ありて、其折伏門に於ては即ち罪惡を折伏し、煩悶を打ち砕くのであります、其一面の喜びの方面を見ますると、受け難き人身を受けたるのみならず、中國即ち文明國に生ること難しとあるに、何んの幸ひか吾々御互ひは有難き此の昭代の御世に生るを得たり、之に反して彼の滿洲地方や臺灣蠻界や亞弗利加地方の未開の地に生を受けたるものは不幸の極み憫然の至りでありま

修養の三心

す。予が曾て滿韓地方を巡錫して版朝するや、人々彼の地に對する感想を問はれしゆゑ、

國々を巡りくゝて今ぞ知る

御國に勝る國とてもなし

と云ふ一首を以て答へたることありしが、實に開明國に生れた吾々はお互の身の上を喜ばねばなりません。のみならず、吾々は六根具足の體軀を受け來ることは、又たしても喜ばねばならぬ。經文にも六根具足すること難しとお説きなされてある。尤も世には六根不具の人よも六根具足の人が多い所を見ると強ち難きこと、は云ひ得ざるやも知らねども、兎も角六根具足して缺くるなきは、幸福と致さねばなりませぬ。

六根具足

せぬ。よしや文明國に生れても、正法に遭ふこと難しとありて、天地宇宙の至道に契ふ正法に遭ふことや、正義人道を説く所の教に遇ふことは中々容易でないとあります。假令正法に遭ふことを得るも、それを信ずることは難しとありて、吾々の如く從晝至夜御經の只中に蹲居してゐると云うてもよい位の境界ですら、信ずること甚だ困難であつて、偶々信ずることを得ても其信じたる所を實行することは又難いものであります。

然れども、その困難をも忍び、勇往奮迅、更に進んで修養に怠りなかりせば、その信じ難きをも信ずるを得、行ひ難きをも行ふことを得るに至るべし。さは云へ、吾々御互の日常は、果して正しき道を履踐

人道の捷徑

してゐるのであらうか、心の欲する所に從て則を踰えぬであらうか、自ら省みて誠に慚愧に堪へぬ次第であります。去りながら、心靈修養の如何によりては、向上の鐵關を十字に打開いて、直に進前するを得ると思へば眞に滿腔の喜悅に堪へぬ。葛城の慈雲尊者は「人身の貴重なるを知るは人道の捷徑なり」とお説きなされてある。世人の多くが、珍品なり貴重品なりとし云へば、一個半個の道具器物に對してすら、紙に包み袱紗に纏ひ而して土藏に納めて以て重寶となす、人間の身體は其貴重なること、道具器物と同日の論にあらず、然るに之を疎畧にして敢て自重せざるはそも何故であらうか。

昔し魯の哀公が孔子聖人に向ひ、余の家人に至て健忘家のものあり

細君を忘る

て、河南より河北に移りし時、家財道具は残らず持ち運びたるも、肝心の細君を忘れたるものありしと語られた時に、孔子聖人は、おまへさんも氣を付けよ、人ごとではないと云はん計りに、デロリと哀公を見ながら、細君を忘れる位はまだしものこと、夏の桀王や殷の紂王は己れの身を忘れたるにあらずやと云はれたと云ふことでありますが、實に世の中には己れの身を忘れるもの、み多いのは、慨はしき限りであります。若し吾々が己が身の貴重なるを知るならば、罪惡や煩悶の爲めにあたり生命を毀損し、徳を失ひ職分を汚すが如き行爲のあるべからざる筈なるに、あはれ、飲食嗜好の爲めに、二つとなき生命を亡すが如きは、自らもその淺ましき心に呆きれる位であります。

吾人は如何なる艱難に處し如何なる貧窮に處するも天より受けし此生命と感じたならば、尊ぶべき生命なり貴ぶべき形骸なりと尊重せざるを得ない。女子大學の生徒常に予を訪うて、尋るに宇宙觀死生觀のことを以てす。乃ち予は止みね止みねと此等の問題には一切取り合はざりしなり。自己本心の未だ確乎たらざるものが心を宇宙人生の問題に注ぐ、危険是より甚しきはなし、徒に悲哀の情に驅られて、世を敢果なみ家庭を忘るゝ位が上乘で外何等の益なし。斯の如き高尚の問題は暫く置き朝な夕なに實踐し得らるゝ所の婦徳を養ふに若くはなしと諭して飯すが常なり。

會津公山崎閣齋先生の常に讀書に耽りつゝあるを見一日先生を訪ひ

人間は何等かの樂みなしにはをられぬものなるが、其許には樂みありや否やと尋ねたるに先生答て曰く、予に三樂あり。第一人間に生れ來りたるを樂み、第二に古人を伴とするを樂むと云うて、三千年以前の釋尊や孔子孟子の聖賢哲士と交際して行かれるのは、是れ偏に讀書の賜なりと。第三には曰く云ひ難しと云はれた時に、會津公の曰く、そなたにも人に云はれぬ祕密の樂みありやと。いや私は云ふことは易いが尊公の前にては、曰く云ひ難しで、少しく憚りますと申された時に、苦しくない予が爲めに語られよとの御意に従ひ、然らば申上るが、私は何の幸ひなるかな、貧乏の身に生れたるの喜びます。若し之が不幸にして華族大名に生れたならば、人間に生れた所詮なかりしなら

んと答へたるに、會津公不審の面持にて其理由を問はれたり。そこで闇齋の云はるゝには

支那に蔡仲と云ふ長者ありて、三人の子供に向ひ、命の親は米なるが、其米の來處を知るや、知らば答へ見よと云ひたるに、總領進み出で我れ能く之を知る、米は臺處の釜の中より來れりと。之を聞きたる次男は否々左にあらす、吾れ能く之を知る、米は下男部屋の傍にある白の中より來れりと。之を聞きたる第三男は否々然らず、吾れ能く之を知る、米は裏の土藏より來るなりと云うて、終に三人兄弟共に其來處を知らざりしと云ふ。

憐むべき  
豪富の子  
弟

嗚呼不幸なるかな富豪の子よ、憐れなるかな權門の子弟よ、百味の

飲食を食しても口に叶はず、榮耀榮華を盡しても未だ以て足れりとせざるが彼等富豪の不幸なる所以である。然らば吾々お互ひも山崎闇齋の如く、自らの所業を喜び、自らの境遇を樂んで行きたいものであります。去りながら、消極的の知足安分主義を以て満足せよと云ふのではなく、喜心とは換言せば進取の氣象を意味するものにて、即ち勇氣旺盛に其事に當て遂行せざれば止まざるの概あるものなり。喜び勇みて事に當るや、己れを妨げ己れを害するものに對しては、極力奮闘して目的を達せざれば止まざる底の進取の氣象を振作して行くならば、今日の社會に流行しつゝある、煩惱懊惱に陥る様なことはありませぬ。

第二に老心とは、老婆親切の心を意味する、慈愛の心同情の心を指すので、即ち老父母が子弟を鞠育する心であります。此心を以て子弟に臨む時は慈愛となり、社會人事に對する時は同情となる。予は加賀の千代の「朝顔につるべとられて貰ひ水」と云ふ句を思ひ浮べる毎に、優にやさしき千代女の心根に深く感じ入るのであります。同情の念無情の草木までに及びたるかと思へば、いと、欽慕の情に堪へぬ次第であります。

信州柏原に小林一茶と云ふ著名の俳人ありたりしが、此人の句に「やれ打つな蠅が手をすり足をすり」と云ふ句があるが、一疋の蠅にまで同情慈愛の心を寄せられたかと思ふと、實に吟者の雅懐が忍ばれます。

又彼れの俳句に、外が濱の景とて松二三本と上に雁を描いて、「けふからは日本の雁ぞらくにるよ」と云うてあるが、斯の如く慈愛同情の念を以て萬境に接するが即ち老心であります。道元禪師或る時近江の湖邊を旅行せられし時、一尺の水を酌んで足を注ぎ、残水をば態々歩み寄りて、元の湖水へ戻したりと聞く。同情の念半杓の水に及ぶ是れ老心作用の然らしむる所であります。斯の如きは些々たることの如くなれども、尋常人の能く爲し得ざる所である。此心あらせられたればこそ、今日一宗の開祖として四衆の欽仰を受くる所以であります。斯の如く同情慈愛の心を以て、他人を見る己れの如くして行くならば、社會は全く平和に歸すること疑ひないと思ひます。

七 修養の三心 (其二)

養大心の修

第三大心とは、其心を大山にし其心を大海にすとありて、山は不動の徳を備へ、春風秋雨、依然として巍然たり、如何なる嚴寒に遭ふも如何なる酷熱の夏天を頂くも、巍々堂々として動かざるが山の徳相である、吾々銘々も此の大山の如く、八風吹けども動せざる底の所ありたきものであります。武田信玄の師匠快川紹喜禪師は、織田信長が甲斐を攻めたる時、信長禪師の名望を慕ひ、禮を厚くして招きしも之に應ぜず、却て信長の反對なる、武田家の武運長久の祈禱をなしてをると聞き、短氣の信長烈火の如くに怒り、惠林寺の衆徒、一百餘人を山

門の樓上に追ひ上げ、四面に火を放ちたり、快川禪師は此の火焰裡に在り、泰然自若として、安禪は必ずしも山水を須るす心頭を滅却すれば火も亦涼し」と云うて、遂に火中に示寂せられたと云ふ此の話は、由來禪門に於ける一の美談として傳はりてあります。

また人生は洋々たる春海の如く順境のみにあらずして、逆捲く怒濤の逆境あるとも知らねばなりません。されば順逆二境に在りて毫も動亂することなく、常に心の靖平を持ち、富に處するも貧に處するも、坦然として動かざること大山の如くに、境界を訓練して行くこと肝心なれ。東皐心越禪師と云ふは、支那より渡來された曹洞宗の高徳にして、當時水戸黄門光圀公が深く歸依し、祇園寺と稱する一字を建立

し之に請して住せしめ玉ふ。或る時公は禪師の定力を試みんとて、自邸に招きて饗應せられ、大杯を出して禪師に勧めければ、禪師は何に心なく、大杯を傾げんとしたる塗端に隣室に於て轟然と一發大砲を放ちたり。大抵のものならば仰天腰を抜かす所なるも、心越禪師は平然として、につこと微笑しながら、靜かに大杯を傾けたる状を見て、流石の光圀公も心中大に驚嘆し、これは失禮致しましたと云ふと、ナニ鐵砲は武門の慣ひ別に斟酌に及ばん、然らば御返杯と大杯を差し出す、公は之を受けて將さに飲まんとするとき、禪師はスカサズ威を振うて、「カーツ」と一喝せられた。其聲に驚いて大杯を顛覆し、禪師何にをなさると云はるゝと、禪師はほゝゑみながら棒喝は禪門の慣ひ別に

斟酌は仕りませぬと云はれて、光圀公は益歸依深く敬慕せられたと云ふ逸話が傳はりてをる。苟くも大丈夫と云はるゝものは平常底が斯くあらねばならぬ。吾人も亦斯くありたきものであります。兎角吾々は物ごとに驚いてならぬから、充分禪的修養を積み、事に當つて狼狽せざるやう致したきものであります。

日本は幸ひに坐禮の習慣なるが故に、餘程此禪的修養には好都合であります。洋服着用で職務に従事する人にも、一日の中二三時間位は坐せざるものは殆んどない。其坐するときが即ち一種の坐禪にして、意馬心猿と狂ひに狂ふ散亂心を、一境に引き纏める工夫をするならば、知らず識らずの間に寂然不動の佳境に到達すること疑ひないと信じま



す。又其心を、大海にしてと云うて、百川の朝するに任かせて容るゝの大雅量がなければならぬ。砂石集に面白き話あり。

或る處に阿彌陀佛を尊信する一老婆ありしが、其家は淨土眞宗の門徒にあらざりしと見えて、佛壇に種々様々の佛像が安置しありしが、此の老婆は獨り阿彌陀佛のみ大切にして餘佛は殆んど顧みず、香を焚いて奉つるにも阿彌陀佛の方のみ、香烟行けかしと念ずる程の偏狭ものなりしが、香烟の思ふ様に阿彌陀佛の方にのみなびかすして、壇上の佛像なべて其餘香を蒙る狀を見て口惜しくや思ひけん、竹筒を作り阿彌陀佛の鼻の下へ推し當て、香烟を通はしたりしと云ふ、極めて偏見なる量見なりしも、後の世に或る財産家に生れ絶世の美人と歌はれ

しも、あはれ二八の年に及べる頃、不思議なるかな鼻下に黒々と大なる斑點を生じたり、是れなん、前生に阿彌陀佛のみ大切にしたる偏狭の處置に對する報いなりとて人々語り合たりしとかや。此老婆の如き心の狭き人程世にみにくきものはなし、去れば公明正大の徳を養ふには、寛大なる度量を有せねばなりません。道を説く獨り佛教に限らず、儒教之を説き、道教之を説き、楊墨又之を説く。而して佛教の道を説くや、寺の爲めにあらず、僧侶の爲めにあらず、只道の爲めに道を説くのであります。去れば其學說宗派の異なるに從て、道を説き法を談ずる上に、自ら輕重淺深の差別こそあるべけれ、苟も其説く所眞理の存するならば、學派の如何を論ぜず、宗派の如何を問はず、等しく是れ

佛教に契當するものなりと云ふ見識かなければならぬ。  
 斯の如く儒教道家と相親み、神道と握手し基督教と提携すと雖も、  
 佛教其もの、價値毫も減ぜざるなり。此の態度を以て百科の學說に對  
 し、異教他門に接せんか、悉く是れ良友なり、善知識となりて、共に  
 相携へて世道人心の爲めに千變萬化と活動し行かるゝなり。予常に聖  
 書を繙くに世教を益する個所頗る多し。然れども、平等の中に差別あ  
 りて、化して同ぜざる所なかるべからず、其長を取り其短を捨つる固  
 よりなり、夫れ斯の如くするには大海の雅量を要するのである。聖不  
 動經の中に「大定力の故に巖上に坐し大智慧の故に大火焔を現す」と  
 ありて即ち右手には大智劍を持って煩惱妄想を斷じ、左手には三味の索

を取て降伏せざるの輩を縛せんとするの相であります。  
 降伏せざるの輩とは「ケレドモ」と云ふ。私慾私情のことにして、吾  
 吾は此を爲しては悪い、ケレドモ爲したい。爲させねばならない、ケ  
 レドモしたくないと云ふが如くに、ケレドモケレドモで皆後戻りをな  
 すが故に、淺ましいかな、三百六十五日私慾私情に驅られて、道に遠  
 かる計りであります。去れば三味の索と智劍は以て、智能を啓發し徳  
 器を成就するに缺くべからざるものであります。吾々御互も修養の如  
 何によつては、不動明王の如くに、圓滿完全なる人格を成し能ふもの  
 なりとして聖不動經を説かれたのであります。然ればその不動明王はそ  
 も何處にお在しますやと云ふに、吾々御互ひの心の奥に不斷にお在し

ますけれども、其を信する念力、堅固ならざれば、遂に其威徳現はれざるなり。故に吾人は能く聖賢の教に従ひ、修養訓練を積み以て本心の不動の徳を發揮するに至ては、八面に當つて縦横無盡に發するを得るなり。平常心是れ道と云ふも、皆此の喜老の三心に外ならぬのであります。

老子の師事せる常徒と稱する先生は、臨終の際に老子を招き、口を開いて吾の口中に齒ありやと問はれた時に、老子はこれはしたり一本もござりませぬと答へた。然らば舌ありやと再び問はれぬ。舌は確にござりますと對へし時に、道は遠きに求むべからず、口中三寸の舌頭は以て吾々の師表とするに足ると云はれたと云ふことであります。な

三寸の舌頭

る程齒と云ふものは、其質硬きが故に至て脆きものなれども之に反して舌は柔軟にして而も剛きもので、吾々も道に順て精神を調へ而して萬境に方るや、事としてならざるなく、物として是ならざはなく、所謂心の欲する所に從て則を踏えずと云ふ境界にまで到達せんと欲するならば、宜しく此舌の如くならざるべからず。齒の如く脆きは不可なり、舌は吾々に好箇の教訓を與ふるものにして、即ち甘味も苦味も取て以て悉く之を味ひ、酒も可なり餅も可なり、洋々乎として大海の如くに能く容るの雅量は、吾人に取て實に好模範であります。去れど又其柔軟なる所に決斷力を有し、適せざるものは直に吐き出すの膽力は、まことに馬櫓を切るの勇あり。而して又其味の存する所を試み且つ調

和して趣味あらしむるの徳あり、即ち人生の趣味を充分に能く之を味うて獨り之を縦にせず、直に之を奥座敷に送る、奥座敷に送るとは何ぞや、即ち國家社會を資け世道人心を益するを云ふのである。

斯の如く舌の誠に無言無心にして、能く道徳を履行してゐるが如くに、吾人も亦之にならうて、徳を行ふ標準となし師匠となし以て身を安するならば毫も誤る所なかるべし、道は吾々の口中に在り、道を他に向て求むるの不可なるを云ふ。嘗に禪宗のみではない、道は近きに在り遠きに求むべからず、我見私慾の邪念を捨て見よ、其處に宇宙の大道は坦然として現はる、而して其大道に制せらるゝなく、束縛せらるゝなく、十二時中能く道を制し道を使ひ得てこそ、眞に得道底の人

と云ふべきである。然して此の得道底の人たらんと欲せば、宜しく喜老大の三心を養うて行かねばなりません。

### 八 廻天の力

#### 事 廻天の故

廻天とは、天をも動かすといふ程の意味であります、人には又この力の修養を心掛けねばならぬ。彼の承陽大師は學道の用心を示し玉ふ中に、

「忠臣一言を献ずれば、數廻天の力あり、  
佛祖一語を施せば回心せざるの人なし」

と仰せられて、忠臣の一言は、能く國家萬世の治基を樹て、佛祖の一

語は、能く永劫不滅の徳本を定めます。唐の太宗皇帝が洛陽宮の修復を企てられた時、國財は非常に疲弊し、人民亦た大に困難であつた。ソコデ張玄素が面を冒して御諫言に及び遂に中止せらるゝこととなつた。其時魏徴が張玄素の忠勇を讚歎して「張公の事を論する廻天の力ありと謂つべし、仁人の言其利博し」というたことが、書言故事に出て居ります。天子の綸言は天命の如くである、然るにそれを變更したは正しく天を廻らすの力と謂ふべきである。

彼の支那戰國時代に趙の國に古今無比稀なる玉が御座いました。當時秦と云へる國が非常な勢力を有して居ましたものぢやから、遂に齊楚燕韓魏趙と云ふ六箇國をば亡ぼしました。これより先き、この強き

蘭相如

秦國は趙の小さきを馬鹿にし、其古今稀なる玉を献上致せ、其代りに秦の十五城を與へるからとのとでありました。ところが趙國の方にては、秦が玉の代りに十五城などとは偽り、只玉を取る手段にかくは云ふに過ぎぬ。若し玉を渡さゞれば、この國を奪はんとするにある、こは如何にせんものと大に躊躇して居ました。時に蘭相如と云ふ剛者がありまして申しますには拙者が名玉を献上致して参りませう、然し若し十五城を渡さずんば、此名玉は渡しませぬ、と斷言を致しますからそこで蘭相如を使者として献上すること、定まりました。この使者なる蘭相如は、秦王に玉を献じますと、王は其名玉を手にして曰く、ヤア成程名玉じやと、彼方へコロ／＼此方へコロ／＼轉しては喜び且つ

侍女達に見せては弄遊んで居られた。此様を見て取つた藺相如は、キヤツ中々十五城を渡す氣色もなければ、ムザ／＼彼の玉を奪はれては一大事と、急に顔を和け、實は其玉には、一寸疵がある、献上に及んだる上は、其疵を御知らせ置きたしと申し上ぐれば、王は藺相如に玉を御渡になつた。藺相如は玉を受とるや否や、髪を逆立て、眼を光らせ、大喝一聲して曰く不肖今回玉を献上に及ぶに就ては、精進潔齋して罷り出でたり、然るに婦人如きものが玩弄致すとは無禮千萬、斯かる様子にては十五城と交換をなす見込もあるまじ、不肖一命を捧けて献上に及びし事なれば、十五城を渡さばよし、然らずんば玉を返せと確かと玉を握りて動きません。時に一同は一人として發言するものな

い。相如は同伴の者に玉を渡し持ち歸らせ、自らは悠々として歸途に就き無事に趙の國へ歸つたと云ふ。

何んと廻天の力あり、勇氣絶倫、格外の力量ではありませぬか、吾人も亦隨處に此殺活自在の妙用がなければなりません。然しながら廻天の力とは唯單に大膽に大勇を専らとする、荒々しいと云ふ意味のものとはばかりではない、其雄々しきところに、君子の態度がなければならぬ。

而してあの藺相如が秦へ使した功勞により、上卿の位に擧げられました、時にこの國には、廉頗と云ふ大將軍がありますので、將軍自ら熱ら思ふには、吾は今迄數百の戰場に出馬して、千辛萬苦其功によ

り將軍となつたが、其間の苦辛は非常なるものである。然るに彼蘭相如は、只秦へ使し、只三寸の舌頭を振りしに過ぎぬ、然るに吾より以上の上卿の位に昇るとは、實に不都合なことぢや。見付け次第、一刀兩斷に致さんものと大に立腹をなしたのである。この事が何時となく蘭相如の耳に入つた、蘭相如或る時途に廉頗將軍の馬車に立會した。時に御者に命じまして横途へ避けしめ、且又、其他朝廷に出仕のときも、廉頗の出づるときには、己れ出でざる様になされた。或時御者云く、尊位には彼れ廉頗の如きものを恐れ玉ふは何故ぞ。蘭相如の曰く吾苟しくも、秦國に使し、王及び百官百僚を罵倒したる不肖、何んぞ彼れ如きものを恐れんや、今や敵として、秦の大國を控へたり、若し

秦にして我趙を攻めんか、其衝に當る大將は廉頗將軍なり、唯我と争つて、犬死となるは相互の不利益なり、吾等は一箇のものにあらず、國家の大事を兩肩にするものなり、只恐るゝものは彼將軍にあらずして、國家に對して恐るゝなりと。斯のことを耳にしたる廉頗は、蘭相如が實に君子的剛者にして愛國の忠臣なることを知り、彼れ蘭相如の宅に行き、己れの罪を謝したりと云ふ。

何んと美談ではありませぬか、この君子的態度、これ眞の廻天の力とは云ふなり。

承陽大師曰く、

怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、

廻天の力

面○ひ○て○愛○語○を○聞○く○は○面○を○喜○ば○し○め○、心○を○樂○し○く○す○、面○は○す○し○て○愛○語○  
を○聞○く○は○、肝○に○銘○じ○魂○に○銘○す○、愛○語○能○く○廻○天○の○力○あ○る○こ○と○を○學○す○べ○  
き○な○り○。

と、愛語の徳も亦た是の如く、敵をも變じて味方となし、禍亂をも變  
じて平和と爲し、人を動かす力あることを知らねばな  
らぬ。譬を以て云はゞ、如何に廣き室内でも一片の沈香を焚けば、室  
内全部、其香氣に薰ぜらるゝが如く、又萬斛の水の中に、一滴の甘露  
を灑けば、その水全部が盡く薬となるやうなものであつて、慈愛の  
言語は慈愛の念より發し、慈愛の念は慈愛の振舞を起すものである。  
故に承陽大師は「しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子

とせり」と宜なるかな、眞に能く愛語を爲す人は、其人の人格全部が  
皆慈愛の泉となるものです。故に愛語の人に於ける恰も沈香の如く、  
甘露の如く、自ら社會を感化し、自ら人道を莊嚴するものであります。  
然るに之に反して愛語の徳に辜きて、或は妄言を吐き、或は毒舌を弄  
し、己れを欺き、人を欺かば、少なる一言一句が、往々にして平和の  
社會を紊亂し、天下の人心を動揺するに至ります。

或る人、中江藤樹に問うて曰く、「拙者心中にさのみ怒氣無けれども  
自分の弟妹共が少しでも悪きことをすれば、言荒に叱りつくる癖  
あり、如何にすべきや」と問ふ、藤樹答へて曰く、「是れ體認の疎な  
る故なり、怒りが心中に伏藏されてあればこそ、和順の良心亡び、



開示の巻

覺えず言荒になるなれば、其伏藏の曲者を退治するが必要なり。と、云はれたとあります、其和順の良心を亡ぼす、伏藏の曲者を退治せんければならぬ、釋尊最後の説法に、

若し人あり來つて節々に支解するとも、當に自ら心を撮めて嗔恨せしむることなかるべし、亦當さに、口を護つて悪言を出すことなかられ。

と又、

若し其れ惡罵の毒を歡喜し忍受して、甘露を飲むが如くすること能はざる者は、入道智慧の人と名けず。

とある、これ愛語の徳を發揮せしむる修養訓であります。

今は昔、備前の國主、池田中將輝政公の家臣に、伊木清兵衛といふ忠臣ありき。清兵衛重病にかゝり、今臨終と云ふときに、傍人に告げて曰く、我れ此世に毫も望むものなけれども、只願くは、今一度君公に見えたしとのこと。公これを聞きし召され、特に病床に臨まれ、汝若し願あらば何なりとも申し出でよと。時に清兵衛は感涙に咽びつと重き頭をあげ、合掌して曰く、小臣に一の願あり、君には聰明叡智に在せども、磊落の御氣質ありて、動もすれば、事を等閑に過し給ふの風あり、且又客士を好み玉ふの餘り身分に抱はらず、濫りに任用し玉ふの癖ありと恐察す、是れ小臣の常に憂懼するところなり。夫れ千丈の堤も蟻穴より壞るゝとやら、されば、この些事たりとも輕んじ玉

はず、人の任庸は宜しく、其器を選び、至誠切實を以て之を待つべし。是れ聖賢の志しなり。嗚呼君公、冀くはこれを察せよと言上しけり。君公は、この最後の至誠なる忠言を大に喜び玉ひ、落涙以て實行を誓はれ、爾來政務の上にも清兵衛の忠言を省みては事に當り玉ひ、遂に永く國家安全の基を開くに至りしとかや。これ清兵衛が愛語の徳は、君公をして、翻然として、名君たらしめたのである。これ偏へに愛語の力である。

九 含徳の修養（其一）

含徳の意

含徳といふ語は老子の中に、「含徳の厚き赤子に比す」と出て居りま

して語は簡單であるが意味は深長である、含徳とは、徳の奥深く潜んで表に現れぬ貌である。笑を含むといへば別に呵々大笑するではないが、何となく、快き容貌心中の愉快を微に漏らしたやうである。怒を含むといへば大聲叱呼せぬなれど、何か心で憤つた事が掩ひきれぬ状態を示して居ます。即ち含徳は人前をかざらず、表面を衒はぬ、虚飾にならぬ徳を云ふのである。幼小の時師匠からよく云はれたことであるが、少し上手に何かをすると其を手柄顔に話す、それがごく宜しくないといふのであると叱られた。詩や文を作つて少しくよく出来たと思つて師匠の前へ出すと手柄顔してならぬとよく誠められたことを思ひ出すことである。

含徳の修養

私が一年程隨行致したことがありますが、大本山總持寺の昨上棟仙禪師は諒に含徳家であつた。大へん苦學せられたので學寮で勉強する頃夜になると便所を綺麗に掃除して知らん顔をして居られた。同寮の人達が毎日掃除もせないが順番の掃除日に行つて見ると便所は誠によく掃除が届いて居る。誰も便所の臭い所を得意で掃除する人もなからうといふので始終氣をつけて居つたが、未だ何人の業とも知れなんだその筈で棟仙師は夜三更人の全く寢靜まつた頃竊に床を離れて掃除にとりかゝるのであるから他の人に容易に分からなかつたが、誰いふとなく棟仙師の仕事であると知れて全寮皆其徳に感じたのである。

又棟仙禪師が駒込吉祥寺の梅檀林に居られた頃にも逸話がある。此

吉祥寺の梅檀林には私も明治十三年頃居つたのですが随分お粗末なもので今日の學校とは到底比べものにはなりません。まして禪師の居られたのは維新前の事故さぞかしひどかつたであらうと推察せられます殊に苦學なされたので三度の食事と思ふやうには頂けず、或時は焼芋位で過した事さへあつたといふ程であります。丁度白山御殿に湯屋があつてこゝへ梅檀林の生徒は浴湯に參るのであつた。其頃は大抵月に三四回位の入浴が普通で、棟仙禪師の如きは僅に月一回であつた。禪師が湯に來ると大迷惑なのは湯屋であつたと申すのは、人より先きに入つて一番あとから出るので随分長い時間をつぶした。それは何うかといふに自分の身體は勿論洗ふが朋達の背を一人一人流さして貰つ

たのである。人に強ひられたのでなく自ら進んで流して、而も些しもそれを傲りとせられなかつた。禪師は天性聰敏伶俐といふでなく物覚えなども人よりはかぐしく進まぬのでどうかして一人前の僧侶になりたといふ一心で何事にも入念に、親切に致し、其れを人に示したり驕ぶるといふことは露程もなかつたのである。果せるかな、禪師含徳の修養は後年其の光彩を放ち徳望道俗の推重鑽仰する所となり、往年の一寒僧は洞門の管長にまで昇らせた、誠に尊い且趣味ある話であります。

翻て現今の世の狀態を見ますると、どうも含徳の修養が缺けて居る様に思はれます、實に慨嘆の至りではありませぬか。

10 含徳の修養 (其二)

徳川時代京都で古學を唱へた大儒伊藤仁齋先生の子息に介亭先生といふ至極正直温厚の方があつた。仁齋先生の門下に二三の人々誘ひあうて夜遊びに出かけるものがあつた。朝早く塾に歸つて來ると未だ寢て居ると思ふに既に若先生介亭氏が玄關のすぐ側で一心に經書を讀んで居る。弟子共大に當惑して入るに入れず歸るに歸られず進退谷まつたが、その中の一人に頓智のよいものが在て板扉の節穴から、「火事だ火事だ」となつた。すると介亭先生忽ち二階から物見へ上つて四方を眺めて居る。そのひまに書生仲間はずぐ家へ入つた。介亭先生暫

時物見で火元をさがして居つたが一向煙もでぬので下りて来て、またもとの通りに本をよんで居る。遊び仲間の弟子共は次ぎの夜も遊びに出かけ、翌朝歸つて見ると若先生例の如く玄關脇に端然と坐して勉強せられて居るので、また火事の聲色で先生を物見へあけて自分達は安全に歸つた。かくすることが殆ど月に三四回つゞくので、ある人が「先生が月に三四回づゝ物見へお上がりになるのは火事をさがすのでござらうか、あれは遊び仲間の書生の策とは御存じないですか」と尋ねますと介亭先生は「それは私も知つて居る、併し父が師匠として叱かる役である、自分はその役でない。又遊びに行きたいのは若い人にありがちであるし、火事といはれて、もしほんとの火事であつたら困るか

ら火事だといはれ、ば物見へ上がるので時には運動になつてよい」と申された。之の話聞いて流石聲色までつかつて先生をだまして遊びました書生も其行を改めたといふことであります。是介亭先生の含徳の致す所であります。

かういふ性質の方であつたから父仁齋先生の時代から僕であつた八助といふ老人を可愛がつて使つて居つた。介亭先生は鮑が大層好きであつたが、或時知己から鮑を貰つたので八助に言ひつけて「少しこのままねかして置いてあとで料理してくれるやう」と其の鮑を渡しました。然るに晩になつても鮑が出ない、朝になつても鮑が出ない、晝になつても鮑が出ない。「八助鮑はどうしたか」と尋ねると「あれは寝かして

あります」といふから臺所へ行つて見ると庖丁の上に鮑をねかし其上にふきんをかけてある。正直一遍の八助故何かき、違へてかうしたことだらうと別に腹もたてずにそのまゝにすんだ。

どんな學者でも智者でも胸中一片の誠なければ人ならず、愚者と雖誠あれば聖賢の門下なり。愚直八助の如きも亦介亭先生相應の僕といふ可きであらう。

介亭先生の兄で東涯先生といふ方はある晩遅く歸宅する途中便を催したので人の家の樋にした。で五六丁行き過ぎて考へたがあの樋は天水桶であらう、あれへしては申譯がないといふので引きかへして真夜中にも拘らず其の天水桶の家を叩き起し實は伊藤東涯と申す者、只

東涯先生  
と天水桶

今闇夜で天水桶に不重寶致して相すみませぬと鄭寧に詫びて翌日になり天水桶を作り直して返したと申す話で、之も亦含徳の致す所であり

ます。  
陰徳あれば陽報あり、人にかくれて便所掃除をしたり又は背を流したり、草もとつたりすることはやがて其人の徳行を顯す基礎となるのであります。人が認めてくれぬからとか、骨折てもほめてくれぬからとかいうて自分の當然なすべき業をもなさぬ人の多い今日の世の中はいかに徳義の行はれて居ぬか、思ひやられます。人の認めてくれたり、譽めてくれたりするのをあてにせず、自ら進んで陰徳を施し道を行つてゆくならばこれ即ち含徳の修養になるのであります。

含徳の修養

一一 孝順至道（其一）

孝順の意

孝順と云ふは、乃ち親に對する孝行の道である。梵網古述記には、「孝は養育を謂ひ順は恭敬を謂ふ」と註してある。ツマリ親を養育して不自由なからしめ、親を恭敬うて不安心なからしむることぢや。古語にも「父母に事ふるもの順より善きはなし」とある。此孝順は實に是れ人間百行の基、萬善萬徳の源とも謂つべき大切なる教であります。故に孔子は「夫れ孝は天の經なり地の誼なり」とも「夫れ孝は徳の本なり教の繇て生ずる所なり」とも云ひ、曾子は「百行の先、孝に過ぎたるは莫し」と云ひ、太田元貞は「人たるの道の第一は孝の一字に在り」

と云うてある。我が佛教では宋の明教大師が「夫れ孝は三教皆な之を尊ぶ、而して佛教殊に尊ぶ」と云はれた通り、孝順の道を教ふることが一層高尚にして且つ奥深いぢや。されば釋迦牟尼世尊は成道の最初に於て諸の弟子をして第一に父母と師僧と三寶とに孝順せよと教へられて「孝順は至道の法なり」と仰せられたことが梵網經の中に明らかに於て居る。而して佛陀の生命とも謂ふべき御戒法も其根原は孝順の二字に歸するのであります。尤も佛教に於て孝順と稱するは、單に父母に對する孝行計りではありませぬ。君主に對する忠義も目上の人に対する敬禮も、佛法僧の三寶に對する信心供養も皆な此中に籠つて居る。抑も佛教では毎度御話しに及ぶ通り、四恩と云うて四通りの恩

四恩の解

開示の卷

處を説き、此恩に報ゆるを以て最大至要なる行としてある。四恩とは、心地觀經には一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、是は父母以外の所有家族及び社會を總括したる人類一切の恩を云ふのです。四に三寶の恩、是は宗教上の恩です、是を四恩と申します。又正法念經には一に母の恩、二に父の恩、三に佛の恩、四に說法師の恩と説てある。釋氏要覽には一に國王の恩、二に父母の恩、三に師友の恩、四に檀越(保護者のこと)の恩と説てある。何れにしても父母は恩處の中の大恩處である。此御恩に報ゆるのが取りも直さず人間の道であります。故に心地觀經には、「恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり」とある。聖道とは佛の道と云ふことであります、殊に教育の御勸語には「我が

忠孝一體

臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す」と仰せられ、忠孝の二道を以て教育の淵源、道德の基礎なるぞと御示し下されてある。而して忠臣は孝子の門に出づと云ふが如く、孝行の人たらざれば忠良の臣たることを得ざるは自然の道理である。況や我國神隨の道は忠孝は一體である、眞に孝なる人は必ず能く忠を盡す、眞に忠なる人は必ず能く孝を守る。此二つの者會て相離るゝこと無いのです。

親の御恩の廣大なることは今更事新らしく申す迄も無いが、凡夫の淺ましさは猶ほ十分に其御恩を感じる心が起り悪いものです。それ我等が母の胎内に托りてより今日に至る迄の、親々の艱難苦勞は中々に



父母の十恩

言辭の盡すべきにあらず。佛は父母恩重經に於て父母の十恩を示されてある。一には懷胎守護の恩。是は懷妊中胎内の子を守護する恩である。昔より胎教として胎内の子を教育する教がある。妊娠中の母親の精神境遇及び身體の強弱迄が自づと胎兒に影響するに依て、列女傳には、婦人が子を妊んでは、寢るにも側たす坐るにも邊らず立つにも躡せず、邪き味は食はず席が正しからねば坐らず、目には邪き色を視ず、耳には淫しき聲を聽かず、夜は優雅なる歌や正しき事を聞く、斯くする時は生るゝ子は自づから形容も端正にして才智も人に過ぐると説てある。二には臨産受苦の恩。彌々出産となれば、其母親の命の如きは助かるか死ぬるか云ふ瀬戸際ぢや、其苦しい中でも唯だ生れる子の事をの

み思つて、殆ど其身の苦惱をも打忘るゝが親心です。三には生子忘憂の恩。満足に生れたと云ふ聲を聞けば己れの憂さを忘れて、唯だ他愛も無く喜ぶのみぢや。四には哺乳養育の恩。嬰兒の食物は母親の乳ぢや。母の精血を以て己れの手足を伸ばして貰ふのである。五には嘔吐甘の恩。親達が嬰兒に食物を食べさせる時は、先づ己れの口に嘔んで苦い處は自分が吸つて甘味の部分を其子に與へて下さる。六には廻乾就濕の恩。抱寝をされ乍ら始終褥の上を汚すが嬰兒の常ぢや。然るに親は少しも之を厭はず、却て自分は濕つた上に臥して嬰兒を乾いた方に移して寝かして呉れる。七には洗濯不淨の恩。上流の方々は別段とするも、普通の親達は毎日の様に小兒の汚れた衣服から蒲團まで

を洗濯して露程も厭ふ心が無い。八には爲造悪業の恩、我子の爲めに  
 は随分悪い事をも致し罪を造ることも少なく無いぢや。九には遠行憶  
 念の恩。我子が大きくなつて遠方へでも出懸れば、寝ても寤ても我子  
 の上を案じ煩うて、人知れぬ苦勞の淵に沈んで居る。十には究竟憐愍  
 の恩。我子の爲めには生涯苦勞をして死際迄も憐愍の情は絶えぬもの  
 ぢや。冷泉院様の御製に「年へぬる竹の齡を返しても子の代を永く成  
 さむとぞ思ふ」とあるを拜しても、親の慈愛の如何計り深きかは察  
 せられます。以上十通りの恩は重に母親の方に係る様ではあるが、我  
 子の爲めの艱難苦勞は父親とても變りは無いぢや。斯く迄に苦勞をし  
 ても、それを苦勞とも思はず、市原王が「言とはぬ木すらいとせ有

人情の極

りとふを唯獨子に有るが苦しき」と詠まれし如く却て子の少なきを歎  
 つのが親心ぢや。山上憶良は「白銀も黄金も玉もなにせむにまされる  
 寶子にしかめやも」と詠じ、子を以て天下無比の寶と爲て居る。又紀  
 の貫之が「世の中に思ひあれども子を戀る思ひに増る思ひなき哉」と  
 讀み、藤原兼輔が「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬ  
 る哉」と詠み、福住正兄が「子を思ふ親の心の内にこそ涙の落ちぬ日  
 はなかりけれ」と詠みしが如きは、何れも人情の極致と云ふべきであ  
 る。元來人間は情の動物とも謂つべきものであるが、情の中でも親子  
 の情愛程自然にして且つ神聖なるものは無い。此情愛は親となつて見  
 なければ解らぬと云ふことである。諺に云ふ「子を持つて知る親の恩」

で我子の爲めに心配もし苦勞もして見て、始て我親も亦たかくありし  
 ならんと想像し得られるぢや。故に藤原基長の歌には「たらちねの心  
 の闇を知るものは子を思ふ時の涙なりけり」とある。新千載集には、  
 「人の子の親になりてぞ我が親の思ひはいとゞ思ひ知らるゝ」とあり  
 風教百首の中にも「愛くしと子を思ふ毎に我もしか育くみましゝ親ぞ  
 戀しき」とあり、小澤蘆庵も「子を思ふ道に惑ひて今ぞ知るちゝぶの山  
 の深き恵を」と詠んで置かれた。されば人間たる者は、我子を愛いと  
 思ふに付ても益々親の御恩の貴ときことを思ひ、親の有難きことが  
 解ると共に我子の教養に心を注がねばならぬではありませんか。  
 是の如く親の御恩は深大であるから、中々此御恩に報い盡すと云ふ

哀々たる  
父母

反哺の孝  
三枝の禮

ことは出来ぬ。詩經にも「父我を生じ母我を鞠す哀々たる父母我を生  
 じて苦勞す深恩を報ぜん」と欲すれば昊天極まり罔し」とありて、父母  
 の御恩は天の廣大にして極まり罔きが如くであるから、増一阿含經に  
 は「父を以て左肩の上に着け母を以て右肩の上に着けて千萬歳に至り  
 衣服飯食牀榻臥具病瘦醫藥し即ち肩上に於て屎尿を放たんも、猶ほ恩  
 を報ずることを得ず」と仰せられてある。斯程の大恩を受け乍ら、親  
 を親とも思はず親をして不自由不安心に陥らしむる様な事あらば、  
 其人は最早人間の分際では無い。鳥にすら反哺の孝あり、鳩にすら三枝  
 の禮ありと聞く。不幸なる人間は畜生よりも劣れる者と申さねばなら  
 ぬ。孔子も「親を愛する者は散て人を惡まず親を敬する者は敢て人を

慢らず、愛敬親に事ふるに盡して徳教百姓に加はる」と言はれた通り親を大事にせぬ様な者が他人を愛する筈が無い。親を馬鹿にする様な者が他人を敬ふ氣支は無い。愛なく敬なければ人間の道は茲に亡びて仕舞ふ。尤も世には親を疎末にするが子供は能く愛いがるとか、親には邪見だが女房には親切ぢや杯と云ふものがあらうが、それは決して眞に子供を愛し女房に親しむのでは無い。所謂一種の病的愛情であるから、其愛情こそ却て御互の身を傷くる本となるに相違ない。故に我等御互は束の間も親を忘るゝこと無く、ドコ〜迄も孝順の道を全うせんとの心懸を持たねば、人間に生れた甲斐が無いです。

一一三 孝順至道 (其二)

孝順の仕方

然らば孝順の仕方は何うかと云ふに、是は其人の身分と境遇とに依りて一様には參るまいが、大體を云へば有形の孝と無形の孝との二つに分かれる。乃ち目に見える孝行と目に見えぬ孝行とである。モツと細かに申せば身體の上の孝と精神上の孝との二、又現在一世の孝と未來永遠の孝との二つとなります。身體の上の孝は重に目に見える方に係り、精神上の孝は重に目に見えぬ方に係る。次の一世の孝と永遠の孝とは何方にも有形無形の二様があらうと思ふ、先づ身體の上の孝順を演ぶれば是にも二通りある。第一は親の身體を大切にすることです、

身體上の孝順

孝順至道

曾子が「孝子の老を養ふや、其心を樂ましめ其志に違はず、其耳目を樂ましめ其寢處を安んじ、其飲食を以て之を忠養す」と云ひし如く自分の力の及ぶ限り、食物衣服居室萬端を調へ、誠を盡して親を養ふ様にせねばならぬ。曲禮には「凡そ人の子たるの禮は冬温かにして夏清しくし、昏べに安じて、晨に省み、出れば必ず告し反れば必ず面す遊ぶ所必ず常あり習ふ所必ず業あり」とあるが、冬は温かにして上げ夏は涼しくして上げ、夜は安樂に臥ませ朝は怠らず御機嫌を伺ひ外へ出るには必ず行く處を告げ歸つたならば直ぐ面を見せる様にし、遊ぶ事も稽古する事も親に心配を懸けぬ注意が肝要です。萬一親が病氣の場合は眞心を捧げて成るべく自分で看護の勞を執るが宜い。不幸

にして御歿れになつた場合は哀悼の情を盡して送葬追善を營なむべきである。次には自分の身體を慎しみ護ることも重大なる孝順である。孝經の中に「身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始なり、身を立て道を行なひ名を後世に揚げて以て父母を顯はすは、孝の終なり」とありて、此身體は父母の遺體であるから此身を大切に於て毀ひ傷らぬ様にするが孝行の始である。コ、を深草の元政上人は「惜しからぬ身ぞ惜まるゝ足乳根の親の残せる形見と思へば」と讀み、宗良親王は「我ながら我ぞなつかし亡人の別て残せる形見と思へば」と讀まれてある。されば髮一本でも疎略にしては濟まぬ、衛生に注意して身體を強壯にし自ら好んで危きに近らざる皆な是れ報恩の行持である。曾

子が病危篤に迫まりし時門弟子を召して「予足を啓け予手を啓け」と命じ、親から戴いた此身體を別段の怪我もせず其儘御還し申すことが出来ると云うて、安心せられしが如きは、無限の意味を存する話である。故に曾子は曾て「身は父母の遺體なり、父母の遺體を行ふこと敢て敬せざらんや、居處莊ならざるは孝に非ず、君に事へて忠ならざるは孝に非ず、官に莅んで敬まはざるは孝に非ず、朋友に信あらざるは孝に非ず、戰陣勇なきは孝に非ず、五者遂らざれば災其親に及ぶ、敢て敬せざらんや」と言うてある。江戸時代に淺草に孝行酒屋と云ふ號を取つた酒屋があつた。其主人は捨兒であつたが成長の後勉強して立派な酒店を開く様になつたのぢや。或時母親が非人の如き姿で手寄

孝行酒屋

て來たのを、引取は引取つたもの、我を棄てた親だと云ふので少しも親らしい取扱をせず、丸で下女同様に使つて居るので實母虐待と云ふ評判が立つたです。それが町奉行の耳に迄入つたので捨て置かれず、奉行は彼を呼出して見ると頗る正直なる人體で親を虐待する様な悪人とも見えぬ。そこで一應訊問に及ぶと彼の答へに、私は親から恩を受けては居らぬ。従つて孝行する義務はござらぬと云ふのであつたそこで奉行は然らば誰の御蔭で今日の身代になりしぞと問はれますると、それは私の腕で仕上げたのでありますと答へました。其時奉行は然らば其腕は誰の御蔭で出來たるやと尋ねられしに、彼はハツタと行き詰り暫時考へて見て、始めて親の御恩と云ふとに心付き、幾回か御詫

孝順至道

を申して我家に歸り、それからは孝行酒屋と言はれる様な孝行者になつたと云ふことぢや。さすれば、我等御互に一層父母の遺體たる貴とき此身を疎略にせず、益々此身の美德を磨き顯はすが親に報ゆる所以の道であります。然れば容を自墮落に持たり、國家に不忠を働いたり、職務を等閑にしたり、信義を缺いたり、奉公の勤を怠つたりするは、皆此身を汚し親の顔に迄泥を塗る様なもので、不孝の責は決して免るることは出来ませぬ。又孔子は門人子夏の孝を問ふに答へて「色難し」と教へられてある。常に機嫌の好い顔色をして苟にも忌な顔を見せぬが子たる者の慎みぢやが、是は中々難きことぞと注意せられたのであります。故に禮記には「孝子の深愛ある者は必ず和氣あり、和氣あ

色難し

る者は必ず愉色あり、愉色ある者は必ず婉容あり」とありて、深く親を愛する者は、自然に柔和の氣風がある、従てイツも愉ばしけなる顔色と婉なる容儀とが具はるものであります。餘りに嚴らしく窮屈らしくして他人行儀に渉るは親の心を安んずる所以で無い。古歌に「限りなく嬉しきものは親と子の笑たる顔を見つるなりけり」とあるも我等の心得の一である。又「父召す時は諾すること無く唯して起つ」と云ふ教もある。諾も唯も應答の詞であるが、諾よりも唯の方が恭を存して居る。親に呼ばれた時はハイと柔しく軽く答へて直ぐ其傍に行けよと云ふことです、是も身體の上の孝行であります。世には親から何か言付られでもすると、碌々挨拶もせず不平らしき顔をしてブツ／＼

言うて居る人を見ることがある、實に見惡うて堪らんです。多少無理を言うたにもせよ、不平らしい顔をせず忌な返事もせず、飽迄柔順なるべきは孝子のたしなみでありませぬ。

精神上の孝

第二に精神上の孝と云ふは、精神的に心の底から親を大切にし親を敬ひ尊んで、何事も誠を以て親に盡し獨り親の身體に不自由なからしむるのみならず、更に親の精神にも満足と歡喜とを與ふるとであります。本居宣長が「父母は我が家の神我が神と心つくしていつけ人の子」と詠し如く、兩親こそは生た此世の神様である。故に、「親なくばいかで此身の生れ出む親に背ける人は人かは」一口の言朝夕の禮迄も皆な真心より出づる様にせねば眞の孝とは申されぬ。親の有難いことは誰

でも知ては居れど「病は小癒に加はり孝は妻子に衰ふ」とあるが如く私情私欲の爲めには親に對する愛敬の心が薄らぎ易いものぢや、孔子が子游の孝を問ふに答へて「今の孝は是れ能く養ふを謂ふ、犬馬に至るまで皆な能く養ふあり、敬せずんば何を以て別たん」と示した通り、親を満足に養うた計りでは本當の孝順にはならぬ。況てや親の病を看護するとか親の死を葬ふとか親の祭りをすると云ふ場合は、一層精神的に出づる様にせねばならぬ。親を邪魔にして別莊の方へ送り込み自分は家で勝手な事をして居る様な人は、何で孝順など、云はれませう。況て世間を飾る虚涙、義理一片の弔法事杯は全く精神上の不孝者と申さねばなりません。



次に現在一世の孝とは世間普通の孝行です、乃ち親の生涯を安樂ならしめ、且つ古語に「大孝は身を終るまで父母を慕ふ」とある様に自分の命のあらん限りは、親の歿後と雖も能く其志を繼いで益々家名を揚げ、又追善供養を営みて親の菩提を弔ふの類であります。孝經には「孝子の親に事ること、居るときは其敬を致め、養ふときは其樂みを致め、病めるときは其愛を致め、喪には其哀を致め、祭には其嚴を致む、五者備はりて然して後能く親に事つる」と、云うてある。一世の孝を説き盡して殆ど餘蘊なき教ぢや。平居して事なき時は至心に親を大切に飲食衣服等の養は親の快樂安悦を旨とし、若し病ある時は憂ひ悲しみて一刻も早く癒えしめんことを圖り、不幸にして歿ならねば中心

より哀み歎き、忌日命日の祭には齋戒して其禮を嚴にす、是れ孝順の始終である。此外位に驕る事と法を亂る事と人と争ふ事との三を誠めてあります。又孟子には五通りの不孝を擧げて「其四支を惰りて父母の養を顧みざるは一の不孝なり。博奕し酒を飲むことを好んで父母の養を顧みざるは二の不孝なり。貨財を好み妻子に私して父母の養を顧みざるは三の不孝なり。耳目の欲を従まゝにして以て父母の戮を爲すは四の不孝なり。勇を好み闘ひ狼りて以て父母を危くするは五の不孝なり」とある。之を要するに現世の孝を全うせんには、親を大切にすると同時に自身を慎み護り、親の生前は言ふに及ばず、其死後迄も親の志に報いんことを努めねばなりません。貝原益軒の語にも「凡そ

君子の學問は智仁勇の三徳を本とし、父子君臣夫婦長幼朋友の五倫を道とすべし、就中忠孝を重んずべし君父の恩を忘るべからず」又「凡先祖父母に孝なるの道は、奉養祭禮に限らず、聖學を習ひに義の道を行ひ、其家業を勤て其名を揚げ父母先祖の名をあらはすを以て孝行の道とすべし」とある。神道家の大國隆正も「孝は人間一生の道、兩親存生の内は勿論のこと、たとひ我身年たけ兩親に後れたりとも、此身は其遺體なれば此身心の持様正しからざれば即遺體を傷ふの道理なれば、父母の神靈もいかでか安心満足あるべき、しかれば即不孝の道なり」と云うてあります。且つ子たる者は外出をしても親に心配させぬ心懸が肝要ぢや。大江千里が「秋の日は山の端近し暮れぬ間に母に見

えなんあゆめわが駒」と詠みしは親の膝下に歸るを急ぐ孝子の至情です。小式部の内侍が母に先つて死ぬるを悲みて「いかにせん行くべき方もおもほへず親に先立つ道を知らねば」と詠んだが實にや親に先立て死するは、親への不孝自分の不幸ぢや。故に禮記には「父母在す時は敢て其身を有せず敢て其財を私せず」とある。有すとは自分の思ふ儘にすることです。又「父母在すときは友に許すに死を以てせず」ともある。天命なれば是非も無いが、自分の不注意又は勝手の處置を以て命を縮むる様な事は、最も恐るべき罪惡と申すものぢや。又花山天皇様は「思ふこと今は無きかな撫子の花咲ばかり成ぬと思へば」と詠ぜられてあるが、親は我子の成人と立身とを何よりも喜び樂むが故に、

身を立て名を揚げて父母の徳を顯はすは至極の孝であります。又親の死後は暫くも親の事を忘れぬが子たる者の心得ぢや。源道濟も「歸りては先づたらちねを見し物を今日は誰にか逢んとすらん」と歎き藤原能清も「たらちねのあらばあるべき齡ぞと思ふにつけて猶ぞ戀しき」と詠みて歿き親を慕うて居るではありませんか。然るに世には親の命日さへも忘れて居る者さへありと聞く、實に悲しき極みと申さねばなりません。

未來永遠の孝

未來永遠の孝とは我が佛教に於て教ふる所の孝行ぢや。乃ち親の現在を安樂ならしむるとや、追善供養を營むことは言ふに及ばず、生き易り死に易り未來際を盡して孝順行を爲すことである。楠公兄弟が

宗教的大信念

孟蘭盆會と報恩

湊川戦死の砌、七度人間に生れて以て國賊を斃し國恩に報せんと誓はれた様に、両親の生々世々に向つて菩提を弔らひ又自分の生々世々を盡して報恩行を營なむことであります。是は宗教的大信念が無ければ出来ぬぢや。孟蘭盆經に據るに、釋尊の高弟目蓮尊者の母親は一生邪見なりしを以て死後餓鬼道に生れた。尊者悲み歎くも之を救ふに由なし。釋尊の教を被むりて始めて七月十五日自恣の日に於て、母の爲めに孟蘭盆會を設けられた。孟蘭盆とは極重の苦を救ふの義ぢや。母は遂に此功德に依て餓鬼の苦患を解脱せられたとある。時に釋尊は諸の弟子に對して、汝等は向後毎年七月十五日には父母乃至七世の父母の爲めに孟蘭盆會を修し、以て父母の慈恩に報ぜよと仰せられました。

孝順至道

是が盆の由來である。此外佛教に於て修行する七日の追善、忌日命日の佛事等も皆父母永遠の冥福に回向するのであります。更に進んでは、父母の父母、又其父母の父母と云ふ様に先祖代々に遡りて追孝を勵むが佛の教である。加之一段廣き意味を以てする時は、一切の衆生は皆我等と親族的關係を有するものと念じて、法界平等に利益せんことを期するぢや。承陽大師の御歌に「六の道遠近迷ふ輩は我父ぞかし我母ぞかし」とあるが如く、三界六道の衆生は盡く我同胞兄弟我父母骨肉と云はれる道理がある。曠劫多生の間幾度か生れ幾度か死する間に於て、互に君臣となり親子となり夫婦となり兄弟となり朋友となりし因縁あればこそ、現世に於て目にも觸れ耳にも觸るゝのです。

されば耳に聞ゆる小鳥の聲、目に見ゆる昆蟲の姿、何れか因縁なかるべき。斯かる觀念を以て孝順の道を行ふ時は、自から恩禽獸に及び愛群類を攝すと云ふ大慈悲大行願とも爲るぢや。此邊の處は篤く信じ深く觀する人で無ければ領解兼るであらうが、此處迄孝順の徳が進んで來ねば、圓滿なる佛心佛行とは申されぬ。是れ乃ち孝道の最も大なるものであります。

一三 孝順至道 (其三)

是より古今の因縁に就て最も有り難く感ぜらるゝ事例を少々演ぶることゝ致さう。

神武帝皇  
祖大神を  
祭り給ふ

開示の巻

一三〇

應神天皇  
御妃兄媛  
の孝情を  
愛で給ふ

神武天皇が中國の賊を討ち玉ひし時、朕は日の神の後胤なれば日に向  
て戦ふは宜しからずと仰せられ、天日を背にして賊を平らけられ、御  
世の始に先づ靈崎を設けて皇祖大神を祭り玉うたとある。爾來代々の  
天皇は皆御祖先を祭り玉ふを以て治世の第一と爲し玉へり。今日も尙  
ほ古の如く一月の元日に行はせらるゝ四方拜の御式を始として、御  
國の大祭祀日の大半は御祖先の御祭祀である。是皆孝順の至道を行は  
せらるゝのぢや。應神天皇の御妃兄媛は御孝心深く在しけるが、或日  
天皇が難波大隅の宮に在して高臺に登りて四方の景色を眺めさせられ  
ける時、御妃は西方を望んで落涙し玉ひける。天皇怪み問ひ玉ふに、  
予父母は西の方に在るを以て戀しさの餘りと御答へ申上られた。天皇

孝子安永  
安次

其孝情を愛でさせられ直に父母の許に歸省の勅許を賜はりしと申すこ  
とぢや。金殿玉樓に侍して山水の風景を眺め乍も、父母の事を思ひ出  
せば、楽しいと思召さぬ。是れ御孝心の切なるものであります。又平  
清盛と云へば名を聞てさへゾツとする様な亂暴な人間ぢやが、其子の  
重盛公は忠孝兩全の賢人であつたゆゑ、公の事蹟を見れば覺えず襟を  
正しうせざるを得ぬ。公一人の孝順は恰も花の如く、能く平家一門の  
醜を藏す程の力があります。又扶桑孝子傳に依るに、肥前加津佐村  
安永安次と云ふ人は父に代て村名主の役を勤めけるが、父母共七十の  
歳を踰えるや、別に一戸を設けて樂隠居をさせ自分は汗水を流して働  
て居た。父は氣の毒に思ひ、吾老たりと雖も身力猶ほ強し汝が耕作の

孝順至道

一三一

手傳をせんと云ひたるも、堅く之を斷わりて老を養なはしめ、且つ一度も貧苦を親に告げたること無く、冬になると夜中に一返宛は必ず御機嫌を伺ひ、夏は木の下蔭に暑を避けしめ、出入共に親に心配は懸けぬ様に注意した。事遂に領主に聞え白銀若干を賜つたと云ふことです。又筑前國宗像郡武丸村の正輔は、父が年老て中氣となり起居も自由ならざりしかば、何處へ行くにも父を負運ひ且つ父の好む物は何なりとも買ひ求めて情を慰めけり。殊に非常の勉強家であつたが、親の頭の上を踏むに忍びぬとて屋根に上る丈はせなんだとある。親の歿後は墓所に詣ること一日も怠らず、且つ慈善の志深く能く窮民を救ひければ、人々其徳に感ぜざるは無し。享保年間國內大飢饉の際、稲苗迄

孝子正輔  
屋根に上  
らず

畫師俊明  
血を以て  
觀音を  
寫す

も一般に枯らしたに獨り正輔の田地だけは不思議に其害を被むらなんだ。されど正輔は一粒も其稻を使用せず、盡く國中の種稻に施したさうぢや。後ち領主の耳に入り一町一反の田を賜はり永く租税等を免ぜられ歿後には特に命じて「孝子正輔之墓」と云ふ碑を建てしめ、領主が碑の前を通行せらるゝ時は、輿を下りて禮を設けられたと云ふことである。是れ乃ち曾子の所謂「孝天に至るときは風雨時に順ひ、孝地に至るときは萬物化盛し、孝人に至るときに衆福來り臻る」の理であらうと思ひます。又越後國新潟に五十嵐俊明と云ふ名高い畫師がありました。天性孝心深く母親病氣の時杯は、左の指を刺し血を以て觀音經を寫すこと七部、爲めに母の病癒ゆとある。寶曆の凶歲には傳來の書畫

孝順至道

妙沖の孝心

や器物を賣拂て救助に充てたと云ふ程の慈善家でありました。両親の居間には朝夕御拜をすること存命の時の如く、且つ勿體ないとて生涯其居間には坐らなんだとあります。又仁明帝の時橘逸勢が罪を得て伊豆の國に流されし時、其女が父に別るに忍びず、官人の叱責をも厭はず晝は隠れ夜は歩みて父の跡を追ひ行きけるに、悲しや父は遠江國板築驛にて病死したれば、彼の女は遂に尼と爲りて妙沖と號し、墓の側に庵を結び懇ろに菩提を弔ひけり。後官より逸勢の罪を宥して贈位の御沙汰ありければ、妙沖は故郷に還りて父を葬むり生涯追孝を營んだとあります。又上野國吾妻郡草津村の農湯本彦三郎の養女たみと云へるは、二十二歳の時養父に死別れ涙の乾く間もあらざるに、夫

孝女たみの奮勵

は怪我の爲めに歩行も叶はぬ不具と爲り、養母も亦病に罹りて盲人と爲り、かて、加へて類焼の難にさへ遇ひたるも、たみは晝夜の別なく單身家業を勵み、二人の病人と一人の女兒とを養ひ、四十八年の久しき一日も忘ること無かりしかば、明治七年内務省より賞典を賜はりました。赤穂義士の内なる堀部彌兵衛金丸の娘幸女は、堀部安兵衛武庸を夫と定めたるも、未だ婚禮に及ばずして主家没落の不幸に遭ひ尋で父及び夫は復讐の志を果たし俱に泉下の客となりければ、幸女は諸國の靈場を巡拜し後に泉岳寺に墓畔の庵を結び、出家して妙海と稱し先侯及び義士の冥福を祈りける。又主家の絶えたるを悲しむ幕府に再興を願ふこと二十五回に及びましたが、遂に容られざりしかば、止む無

妙海の常  
燈同向

支那に於  
ける孝順  
の事例

開示の巻

墓前に常燈明を献じ、九十一歳まで常行回向して操節を全うした  
は、其精神其孝貞實に感すべきの至りであります。

支那に於ても孟宗が雪中に筍を掘り、王祥が氷に臥して魚を得たる  
を始として、孝順の事例は枚擧に遑あらぬぢや。樂正子春は堂を下る  
時足を傷け、るが、弟子に向て「吾之を聞く天の生ずる所地の養ふ所唯  
人を大なりとす、父母全うして之を生む子則ち全うして之を歸す、孝  
と謂つべし、其體を虧かす其身を辱しめず全と謂つべし、君子頃歩の  
間も敢て孝を忘れず」と云うて數月の間憂ふる色があつたとある。漢  
の黄香は親に事ふるに下婢を置かすして、皆自ら之を勤め、夏は親の  
枕や床を扇いで涼からしめ、冬は身を以て席を温めたとある。武王は

文王の病し時衣冠を脱がすして養ひ、文王一度飯を食すれば己れ亦一  
度食し、文王が再飯すれば己れ亦再飯せられた。漢の文帝も其母の病ま  
れた時、目瞬がす衣冠を解かす湯藥は皆自ら嘗めて而して後進められ  
たとある。三國時代に一方の大將たりし願梯は他郷に在りて、父の手紙  
に接すれば、衣服を着替て容を正して推戴きて後に讀み、父病ありと  
聞けば聲を擧げて泣たとある。漢の緹縈と云ふ女は其父淳于公が大倉  
の令と爲り、冤罪の爲めに長安の獄に繋がれる時、自ら長安に上り書  
を呈して冤を訴へ、且つ身を以て父に代らんと請ひましたので、帝王其  
孝に感じて父を免されたとある。又彼有名なる閔子騫は繼母の爲めに  
虐待せられ、嚴寒の時も綿入を與へられざりしが更に恨むる色なく、父

孝順至道



開示の巻  
一三八  
が之を覺りて大に悲り繼母を去らんとせし時、却て涙を流して母の家に在らんことを願うたと云ふ美談もあります。西洋は比較的孝行談が少くないと申すことぢや。彼國の風習として親子の關係が東洋とは趣を異にして居る。東洋は一家の中心を親子の間に置くが、彼國は夫婦の間に置いて居る。それでも親子の情は別物であるから、往々孝順の美談が書物にも載て居る様ぢや。佛蘭西のルウ井ズと云ふ女は二十歳の頃父が病の爲めに盲人となつた。彼は父の心を慰むるを畢生の務となして暫くも其傍を離れず、見る物聞く物に手に取る様に父に聞かせ、父をして更に退屈の念を起さしめざるを唯一の樂として居つた。友達が遊びに誘ひ來りても、父の満足する様子を見るを如何なる遊戯より

孝順至道  
一三九  
も樂なりとて、イツモ辭つたと云ふことです。又紐育の貧民の娘某は、自分の前齒を十五圓で齒醫者に賣りて父を養うたと申す話もある。水戸黄門公は自身の誕生日には、母親出産の苦勞を思つて、必ず衣服を改め正坐して精進をせられたさうぢや。維新創業の先達吉田松陰先生は、幕府の嫌忌を受け安政六年に刑場の露と消えられたが、死に臨んで「親を思ふ心にまさる親心けふの音信なにときくらん」の一首を詠まれた。千古の偉人も親の爲めには血涙を洒ぐ、是れ人情の微妙なる所です。佛敎の上に縁されたる因縁はまだ澤山ある。釋尊は御父淨飯大王の御崩御の時躬自ら寶棺を擔はれました。其時四天王が天降つて代つて之を擔はれしゆるゑ、釋尊は手爐を執て香を焼きつゝ御

先導遊ばされたことが増一阿含經に出て居る。唐の道紀と云へる高僧は常に自ら母を背に負うて孝養を盡され、他人が之れに代らんとすれば「吾母なり君が母に非ず、其形骸の累は乃ち吾事なり」と云うて辭られたとある。大報恩經には須闍太子が亂を避けて他國に遁るゝ時、食物が盡きた爲めに潜に己れが肉を割いて父母を養うたと云ふ話がある。又六祖大師は薪を採りて母を養はれた、名高い御話ぢや。我高祖承陽大師は、三歳にして父公久我内大臣源道親卿に別れ八歳の時母公の喪に遇はせられし時、香の烟を觀じて無常の理を悟り、兩親の菩提を弔はんと御志が動機と爲て、出家得道遊ばされたのであります。永平寺の三代徹通義介禪師は、門前に養母堂を構へて母親を安樂

孝順は人倫の大本

御勅語の要領

に養はれた。其他三國傳燈の祖師、日本各宗の御開山は御一方として孝順の志深く在さぬは無い、何れも皆孝順の龜鑑であらせられます。是の如く古今東西共に孝行に關する有り難い因縁は澤山あつて、百萬分の一だも述ぶることは出来ませぬが、要するに孝順は人倫の大本、佛法の肝要であります。親に孝行なる者は必ず君に忠順なるものである、忠孝雙び全ければ萬善自から現はれ萬德自から備るものぢや。教育の御勅語は國民道德の標準であるから、學校の生徒計りで無く、國民一般が朝夕に捧讀して之を服膺せねばならぬことと思ふが、其御勅語の要領は、忠義、孝順、友愛、和順、信義、恭儉、博愛、學習の八の徳目となる。而して此八種の綱領もツマリ孝順の徳の發展されたも

のであります。申すも恐れ多き事ながら、我が天皇陛下に於かせられ  
 ては、孝道を貴とみ玉ふこと殊に深くましく、既に御製の中にも「た  
 らちねのみおやの御世は白雲のよそぢのよそになりけるかな」と  
 先帝の御事を御慕ひ遊ばされ、又「たらちねの親の教へを守る子は學  
 びの道も迷はざるらん」と孝順は學問の基なることを御示し下され  
 てあります。然るに人智の進むにつれ、世の開くるに従て、一面には  
 種々の缺陷を生じ易く、子として親を侮どり妻として夫を輕んじ、兄  
 弟牆に閱ぎ朋友信を失ふ等の事が段々殖えて來る様に思はる。自殺  
 を企つる者、人を殺す者、盜む者、詐僞する者が日々夜々に社會に現  
 はれて、虛妄は巧になる、驕奢は長ずる、信仰は弱くなる、人情は薄

くなる、思へば思ふ程心配に堪へぬ世の中である。是れ皆孝順の徳に  
 背く所より生ずる惡現象であります。明教大師は孝論の中に「佛の道  
 たる人の親を視ること猶ほ己れの親のごとし、物の生を衛ること猶ほ  
 己れの生のごとし、故に其の善を爲すときは昆蟲悉く懷き、孝を爲す  
 ときは鬼神皆勸む、其孝を資て世に處すれば世と與に和平にして忿争  
 なし其善を資て世に出づれば世と與に大慈にして其世を勸む」と示し  
 である。實に孝順は治國平天下の樞機であります。夫故古歌にも「世  
 の中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのもしきかな」とあり、白  
 隱禪師の粉引歌にも「親の御恩は海より深い、恩を知らねば犬猫ちや、  
 孝行する程子孫も繁昌、おやは浮世の福田じや」とある。されば世間

と出世間とを問はず、能々釋尊が「孝順は至道の法なり」と仰せられた聖順を心に鑠め、生々世々を盡して孝順の道を行ふ様にして貰ひたい。是ぞ眞實國家文明の基礎を確立すべき最大根源でございます。

一四 四種の雅行

釋尊が舍衛國の祇園精舎に在しませしとき、その門弟の爲めに四種の雅行を示されたことがある。而して此四行は智人の遵奉する所、大丈夫の修むる所であると仰せられてあります。其四種とは、父母に孝事し悦べる色をもて之を養ふ(一)、仁を守り慈を行うて終始殺さず(二)、惠施乏しきを濟ひ未だ曾て悖逆せず(三)、聖世に遭

四種の雅行を示し玉ふ

値て榮を捐て道を履む(四)。

この中第一は父母に對する孝道を説かれたるものであるが、忠順の道も自づと含まれて居るものと見ねばならぬ、さればこの行は報恩的行持を示されたものである。第二と第三は慈悲的行持である。其中前者は他を損害せざる事であるから、己れの欲せざる所、人に施す勿れといふ、消極的慈悲である。後者は進んで他を利益する事であるから、己れの欲する所は必ず先づ之を人に施すといふ積極的慈悲である。第四は人生の束縛を解脱て高く心を聖域に遊ばしむる事でありますから取りも直さず、宗教的の行持であります。之れを要するに四種の雅行なるものは、報恩行と慈悲行と淨信行との三大行とに歸するものと見

四種の雅行と三大

四種の雅行

る事ができる。誠に適切なる御訓戒でありまして吾々の常に遵守して暫らくも忘るゝことの出来ざるものと思ふ。或人が佛教にては孝と云ふことを説くとは詳しいが、忠と云ふことを説くことが甚だ疎畧である、父母に厚うして君主に薄きにあらずやと問うたことがある。是れは國情が違うて居るからであつて、決して君父の間に厚い薄の隔てを立てたものではない。若し釋尊の降誕地が日本でありましたならば、敬神忠君を人道の根柢として萬行の軌範を御示し下されたであらうと思ひます。又或人が佛教に於ける孝道の御示しは、母親を本位として居る。孝子經でも、父母恩重經でも主として母親の恩徳を述べてあるは如何なる譯かと問うた事があるが、これは亦た深く怪しむには足ら

父母恩重經

人倫道德の源泉

ぬ次第で、母之れを生み母之を養ふ、母は其愛養に於て親の代表者となつて居る。中には母なうして育つ者もあれども、多くの場合に於て、母親は鞠育の主任者でありますことは事實である。故に佛は其事實を擧げまして父母の大神恩を示されたものであるから、重に母の劬勞を説かれたにもせよ、その眞意に於ては自から父の慈恩をも含蓄して居るものと心得ねばなりません。されば佛教は矢張忠と孝とを人倫道德の源泉となし、毫も我が國の倫理に矛盾しては居りませぬ。殊に佛教では國王の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩、是れを四恩と稱しまして、この四恩に報答するを聖道というて居ります。衆生の恩と云ふのは、君主と父母とを除き他の恩分を總攝たる語である。兄弟、夫婦、親族、

師長、朋友等は言ふに及ばず、社會の同胞世界の人類一切をも包容して、盡く、共同扶持の關係を有することを説いたものである。豈た人類ばかりではない、一切萬物悉く親族的關係を有するものと見ることが出来る。梵網經に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我れ生々之れに従つて生を受けざるは無し、故に六道の衆生は皆是れ我が父母なり」と、仰せられたのは、實に深遠なる妙理を説かせられたものである。三寶の恩は宗教的恩分であるから苟も佛陀の法恩に浴するもの、否な宇宙真理の道を辿るものは、皆この三寶の恩徳に報ゆるの志念がなければならぬ。

次に四種雅行の中の慈悲行を述べます。この慈悲的行持といふのは、

言ふ迄もなく、濟世利民の行ひである、衆生の苦痛を拔濟するのは消極的慈悲行であります。また衆くの人の幸福を増進のは積極的慈悲行であります。前節の報恩的觀念と、慈悲心とは互に表となり裏となりて相離るべからざるものであります。つまり、爲さざるべからずと云ふ正義の觀念より發するのが報恩行で、爲さずには居られぬと云ふ同情の精神から發するのが慈悲行であります。この事は他日稿を改めて詳細なる説明を施して見たいと思ふから今はこれだけとしてお預りにして置きます。次が宗教的行持であります。これは、人生以外に信念の基礎を立つることであつて、聖世に値うて大聖佛陀の教を聞き、人生の榮華に執着せず、進んで無上の大道を履踐のを宗教的行持とは云

ふのである。箇様に申したとて、人生を無視する事でも、人事を放擲することでもない。人生僅かに五十年、一代の榮花も觀來れば、夢のまた夢では無いか、位人臣を極め、富巨萬を有しまするとも、熟ら生の來る所以、死の何れに去るやの所以を觀想して見たならば、人生に於ける快樂も幸福も實に蓮花一朝の露であります。利名に役々として身を勞し、慮を焦し、貪瞋痴慢の暗に包まれ生老病死の雲に蔽はれて居る。もし一息たえなば、萬事休するのである。生れたから生きて居る、生きて居るから働く、働いた後は死ぬ、死んだ後はどうなるか、どうなるか分らぬ。一寸先きは、眞暗黒、是れ以て是非に及ばぬ、と云ふ始末である。

併し人生はそんな曖昧なものであらうか、人間の生活はその様に是非に及ばぬものであらうか、果して一寸先きは黒暗なものであらうか、もしさうとすれば、人生の始終も動物の死生や、草木の榮枯と大した違ひはない様に思はれるのである。併し人生は決して是の如き憐れなるものではありません、唯吾々は五十年や百年間の小天地のみを見て居るから、是非も無き浮世と思はるのである。不生不滅の生命あることを知り、萬世不朽の行願を確立し、その行願を以て、萬行の基礎と爲し、其生命を以て、生活の中心としたならば、紛々たる塵勞争でか、此身を侵すことができませう。渺々たる宇宙は大道の渾體である、森々たる萬象は佛の光明である、吾々の一舉一動一言一行は、この大

道であり、また此光明であるのである。報恩は吾々が永遠の行持であり、慈悲は吾々の無限の活動である。であるから、この淨信行は天地を感動するの威力があり、この活動は鬼神をも泣かしむるの妙用があります。即ち吾が身が是れ佛、我が心が是れ神であります、死は入息であり、生は出息であり、死するも迷はず、生ずるも苦しまず、六輪々轉も也た風流と云ふ、大信念がありましてこそ、人生の行程は一步一步に理想の妙域に進み、佛の光に接することができるのである。乃ち報恩行も慈悲行も、皆な麗しき眞理の花となつて、正覺の果實を結ぶのである。佛教八萬の法門も此の四種の雅行の中に遺憾なく打開せらるゝのである。

六輪々轉也た風流

### 十五 佛教の目的 (其一)

各宗の目的

各宗各派で佛教の目的に對する態度に様々ある。禪宗では即心是佛、此の心がすぐに佛となる、但し身體が佛になるといふのではない。眞言では即身成佛、即ち此身のまゝが佛になるといふ、即ち三密相應と申して身に印契を結び口に眞言を唱へ心に佛大日を觀する時には是れ即身成佛の行相である。又眞宗や淨土宗では他力によりて現在の穢土を離れて淨土に赴くといふ、即ち不都合、不如意の世界から完全圓滿な世界に行くといふのである。何れにしても心といふことに重きを置いてをる。この精神は、古歌にも

佛教の目的



心こそころ惑はす心なれ

心にころ心ゆるすな

とある通りどんな智者、學者でも油断すると、とんだ間違ひを生ずるものである。この不思議な心の作用を佛教では忽然念起と説いてある。前念悪を起すは雲の月を覆ふが如し、前きの念が一寸起るのは雲が月を覆ひ隠すやうで、之地獄の相である。後念善を起すは闇夜に松火を燈すが如し、前念の悪で心は闇夜の如くなつたが、後念の善の爲に松火を燈ほしたやうに明るくなる。とにかく油断のならぬ精神、苦惱に満ちたる肉體を以て此のまゝ佛となるとは許せない、故に淨土に往生するのであるといふ。併しこの未來と現世とを全く別物に離しては

ならぬ、即ち縦に一段飛び越えてゆくものとせないうで、横に見て娑婆は穢土で、極樂は淨土、この汚ないだらけの穢土から、無垢清淨なる淨土にすつと進み歩んで行くものと思ふがよい。

近來日本は文明に進んで來ましたが、文明に進まぬ時はどうしたか、即ち維新前後から海外の文明を眞似たので、文明は淨土、非文明、未開化は穢土とも云へる。處で從來他國に比して文明が十分發達せなかつた我國が四十二年後の今日は何ぞ計らん物質文明の淨土となつたのである。之と同様に精神界に於ても百般の行動を慎しみ、修養怠らざれば、やがて完全なる人格の淨土に至り得るのである。

其れで佛教の各宗各派が種々様々な特色を持して之を發揮して居る

けれども、其の歸する所の目的は一つである、即ち釋尊は之を法華經に具體的にお示しなされてある。

今世安穩

後世善處

語が少しく抹香臭いから、局外者から見れば意味が十分汲みとりかねるが、この八文字が佛教の目的を説きつくして而も簡にして要を得て居るものである。

今世とは現在吾人が生活しつゝある世の中、安穩の二字は平和にして安らか、四海浪穩かにして龍の眠り細やかなるの有様、世界の人心全く平和に歸して全く安穩であるので、之は古來聖賢の心を苦しめた所以である。釋迦如來はこの今世安穩、後世善處といふ語をどういふ

今世安穩  
後世善處

八箇の條  
件

質直

工合にお示しなされたか、今佛説を引いて安穩を得べき方法をお話し致したいと思ふ。

釋尊が安穩を得べき方法を八箇條あけてある。即ち質直、優、醇厚、堅志、同情、師訓、知識、信念である。是れから順を追うて一々説明しませう。

一に質直と云ふのは生地のごとで嘘、偽のない飾り氣のない本性である。兎角虚偽があると一家内でも平和でない、維摩居士は直心之れ道場と説てある。道場とは道の場所、釋尊の成道せられたブダガヤを道場と云ふ。古人はこの道場に至らんとして險惡なる山川を跋涉して、萬里の道程を越えてはる／＼印度の樹下石上の聖蹟を尋ね行くに苦心

佛教の目的

したものであつたが、之は道場を客觀的に求めたものである。

三祖大師は『能は境に由て能たり、境は能に由て境たり』と云はれた。能とは吾々の心である。吾々が善とし惡とし、慾に迷ひ、悟となる、この能は境に由るのである。美しいものを見れば誰も美しいと思ふ、汚ないものを見れば誰も汚ないと思ふ、之は皆外物に心を奪はれ、外の境涯に由りて種々な心を生ずるのである、之の反對であるのが次の句の『境は能に由て境たり』である。誠に前の句に對して面白い、向ふの善惡美醜が皆精神の上につる、即ち山川草木の境は皆吾心に由て生ずとなすのである。

ウツラン  
ボツの修  
行

釋尊御在世の頃、印度にウツランボツといふ仙人が在つた。兎角浮

世の喧がしいのが修行の邪魔といふので、人里離れた深山に入つて頻りに觀念修行を凝して居ると向ふの木枝で烏が阿呆々と鳴いて頗るやかましい。ウツランボツ仙人は折角妻子に別れて修行のため、山に入れば烏に邪魔をされる、乃で今度は物靜かなる河の畔に来て靜坐して居ると、河の淺瀬で魚がはねまはつて、其の音がパチヤン／＼と耳に響いて誠に困る。到頭どこへ行つても靜坐觀念の修行ができずに、煩悶、大煩悶を起して死なれた。扱てこの仙人修行の爲に煩悶して死んだ故、死後天上界に生れて長い月日安樂にして居つた。がやがて果報が盡きて天人に五衰の悲みあり、この仙人も下界へ落ちて飛狸といふものになつた。飛狸とは河獺のやうで翼がついて、鳥でもあるが、

佛教の目的

又河瀬のやうに河の魚を捕へ喰ふといふ奇妙なものに生を換へたといふことである。

精神作用

是はウツランボツが修行の際に、山では鳥に妨げられ、河では魚に妨げられ、悪くいゝの念がかたまつて、魚鳥を屠るものとなつた、精神作用の致す所である。

して見れば鳥が邪魔になるのでない、魚が妨げするのでない、之等の外物に心が動かされて居る間は自身の精神が未だ落着かぬからである即ち直心是道場、里に居らうと山に入らうと、現在この場が即ち道場、さとの席であるといふ覺悟がなければならぬ。之が第一の質直の價値のある所である。

優

醇厚

一に優。私は正直だから御免というて時と場所との考へもなく、無暗に無骨な物を言ふものがあるが、人間はどつか優にやさしいところがないと人が對手にせぬのである、即ち一種の趣味風格がありて後世の模範となる。之がないと裸體の道中のやうに活動も何等人に感化を及ぼすことができないのである。

三に醇厚。之は物事に親切であつて粗暴豪放でないのである。人を待遇するにも、金錢を取扱ふにしても親切綿密にさへすれば決して間違ひはないのである。

御勅語に『忠實業に服し』とあり又『醇厚俗を成し、華を去り、實に就き、荒怠相誠め、自彊息まざるべし』と仰せられたるは一にこの

佛教の目的

醇厚じゆんこうによるのである。浮ういたことのない、自慢じまん氣を離はなれて眞面目まじめに業げふを勵はげまねばならぬといふことは何人なんびとにも分わかりきつた事ことではありまするが、なか／＼實行じつかうの出來でき悪にくいことであるから、お互たがひに誠まことめ合あはねばならぬのである。

四に堅志けんし。佛教家ぶつがくかの口くちから佛道ぶつどうを褒ほめるも可笑わがやしいが、實際じつさい佛教ぶつがくの修行しゆぎやう上じやうには堅志けんしが最も肝要かんえうである。世間せけんの事業じげふをなすとてもやはり同様に志こころざしが固かたくなければ物事ものことはできぬわけである。

去る漢學かんがくの先生せんせい、學問がくもんはよく出来るが、兎角とくかく酒が好すきで朝あさから晩ばんまで飲のんで居をる。あまり飲のみすぎでは身體からだに毒どくであるからと友人いうじん知己ちが心配しんぱいして止とめる、多おほくの門人もんじん達たちも書物しょぶつ抱かかへて通かよふけれ共とも一日いちにちとて一時とき

堅志

とて講義かうぎはしてくれず、酒屋さかやへの使つかひと熱柿じゆく臭くさい息丈いきだけかゞされる位くらゐのもので、弟子でしもだん／＼減へつて來たから、主おもな門人もんじんも切きりに酒さけをやめて下ください、もし今日けふ限かぎり止やめなければ明日あすから弟子でし一同退學どうたいがくしますると云いうたので吞氣のんき先生せんせいも少すこしは醉よひが醒さめて、それではと、

黒くろがねの門もんより堅かたきわが禁酒きんしゆ

修羅しゆら、朝比奈あさひなもやぶる能あたはず

と漢學流かんがくりうの狂歌きやうかを證據しやうこに書いて弟子でしに渡わたした。偕きやう翌日よくじつになつて弟子でしはもう今朝こんてうから立派りつぱに禁酒きんしゆして教授けうじゆして下くださるだらうと言いうて出でかけてくると、先生せんせい昨日けふよりはまた一おほきは大きな茶碗ちやわんで盛さかんに飲のんで居をる。弟子でし方はびつくりして、先生せんせいどうしたのです、約束やくそくが違ちがひますと、右左みぎひだり

佛教の目的

から、よつてたかつて責めると先生平氣で、

我が禁酒やぶれごろもとなりにつけり

それさしてくれやれついでくれ

この先生の事はお互に笑はれぬことである、志を堅くするといふことが、どれ程難いかがこの一話でも分からう。

五に同情。是は思ひやりである。自分ばかり都合がよいからとて、他人の迷惑や難儀を顧みないのは同情心がないからである。自分は一人で生れ一人で育つたのではない以上、自分以外のもの、換言をすれば社會國家の爲、世界人類の爲に出来る限り力を盡さねばならぬ。先年雑誌太陽に『自然界に於ける三大矛盾』といふ論説が出て居つ

同情

たが大分面白い、其の大體は、

凡そ世の中は方則で治まつて行く、然るに人間は仁義道德を云々するが、何を以てこの仁義道德をして居るか、否人世はこの仁義道德に反したる事實、弱肉強食が行はれて居るではないか、この自然界中生物界で最も強いのが人間で、この人間智慧あるが故にあらゆる生物の生命を取つて食用に供し、生殺與奪の權をとつて居るから偉らいものだといつて居る。

然るに一方には動物虐待防止會ができて動物の虐待をとめて幾分か動物を庇ふやうになつたのである。

というてある。盜賊にも三分の理があるので、理窟を言ひ出すと限り

開示の巻  
一六六  
がない、此の同情の念あらば敢て理窟は起らぬので、この同情は先天的に與へられた人間、即ち佛性があるのである。たとへ一枚の着物でも之を大切にするのは衣服に同情したのである。たとへ一錢一厘でも大切にすれば之れ金錢に同情したのである。即ち自分の身を大切に、身の周圍の物を大切に、之れが進んで自身と關係なき他人にも及ぼしてくるのが美はしい佛心、大同情である。

日露戦争の際、畏くも我 天皇陛下には  
四方の海みな治まると思ふ世に

などあだ波の立ちさわぐらん

の御製を遊されたる事を承りました。満洲の野に、日本の大軍が敵

露西亞軍と鎬を削りて鬪ふに當り、勿體なくもこの御製をお作り遊されたるは、諒に敵軍を敵軍と見ず、温かき同情を以て敵軍の負傷兵、捕虜を待遇せよとの一視同仁の御思召に出でたるものと拜察致します。この同情に就きてもあり極端に走りて、彼の草繫比丘のやうに野原で草蔓にとりまかれると云ふやうでは決して正しき同情とは云はれない。即ち佛敎の慈悲は今の同情に相違なきも、あまり之に屈托し過ぎて正鵠を誤つてはならぬのである。

六に師訓。經文の師訓は意味廣く且多いが、吾々は先人の敎訓に違ひ、前車の覆轍を履まぬやうにと誠めるのである。人間が世に立つには必らずかくせねばならぬ、かくすべきであるといふ一種の標準が大

切である、この標準は即ち師訓に求めねばならぬ。もし人心眼暗ければ百千の師訓も之に役立たず、心眼を開けば、溪聲、山色自然そのま  
まが大師匠である。名高き蘇東坡が、

溪聲便是長廣舌

山色豈非清淨身

夜來八萬四千偈

他日如何舉似人

吾人は是の溪聲、山色を師として修養せねばならぬ。

七に知識。私共は知識に乏しい。兎に角世の中に知識は缺く可からざるものであつて、今迄だんくあけて來た所の質直、優、醇厚、堅志、同情、師訓といふ六つの道德の標準が在るにしても、知識に缺けて居つては物事總てにあやまりを生ずる。即ち知識は物事を判斷し、

知識

信念

是非曲直を分別して行くのであるから、この知識をも等閑に附する譯にはゆかない。

八に信念。信念は言ひ換へれば信仰である。信仰は宗教の生命である。以上の七徳に添ふる最後の徳は即ちこの信念信仰である。佛教に種々様の法門を説くけれども、之を簡單にすれば原因結果の理を信するるのである。既に因果の理を信じて行くからには、人の見ざる處を慎み人の聞かざる處を誠めて、日常の行爲を誤らぬやうに心懸けねばならぬ。即ち一言一行も皆是れ確信の顯はれとなるのである。

この八箇條を爲して初めて平和といふことができる。平和も一時的では役に立たぬ、長くつゞいてゆく、今世安穩を得んとならば、則ち



この八箇條の精神を堅く行つて違はない様にすることが肝要である。

一六 佛教の目的 (其二)

次に今世安穩に對する後生善處、後生といふと死んだ後のこと即ち未來とすぐ思つて、地獄とか極樂とかを聯想するが、この後生を縦に眺めないで横に見たいと思ふ。即ち過去と現在と未來とを一段一段梯子で、二階から三階へ昇るやうに考へないで、一筋の大道を甲地から乙地へ行くやうに、平面に横にして見ますと餘程事が易く思はれるのである。

譬へば日本は維新以前に於いては十分開化したとは云はれなかつた

が、維新以來熱心に西洋文物を輸入して四十餘年の今日は既に大體に於て西洋文明諸國に追いつきて來たわけである。昔は夜になつても行燈に蠟燭でさつぱり燈火もとれなかつたが、今日ではランプあり、瓦斯燈あり、電氣燈あり、イルミネーションの如きは實に晝間にも劣らぬ位の光明を放つのである。かく便利に開けて參つたのは我が日本が歐米先進國に學んで、よく文明の利器を應用し、即ち物質上に於ての善處に到つたからである。

乃で佛教に於て後生善處を解するに、悲智圓滿の佛は甚だ尊嚴で在つて吾々の住むやうな穢土には居られぬ。即ち遙に十萬億土の西方極樂世界にのみ在すとばかり考へて、彌陀と自分とは全く縁のきれた他

向上主義

人行儀に思つて、更に兩者の關係をつけたい人がある。それでは佛教の門に入つて未だ堂に上らざるものと云はねばならん。吾々は所謂向上主義、進取主義を探りて日に新たにして又日々に新たなるが如く、一日一日と修養を積み一步一步、理想の覺體、本來の佛地に進み近づかなければならぬのであります。

死んでから善い處に生れるのが後生善處には違ひないが、之は字義の上の一應の解釋にすぎない。今之を廣義に解けば家業に精を出して子孫の爲めを計るも後生善處、主君に忠を盡し父母に孝を盡すも後生善處、社會公衆の爲に盡瘁するのも後生善處である。

往生淨土といふことは結構なことであるが、之を極端に解すると弊

害が生じて来る。何となれば自分は死んでから淨土へ生れるのだから、此世では何でも好きな勝手な事をして暮してもかまはぬ、といふ淺薄な考へを起すからである。淨土門の開山たる法然上人や親鸞上人は決してさういふことはお説きにならなかつた。兎角後世になると開祖、先哲の言を曲解して自分に都合のよき理窟をつけたがるものである。かういふ御都合主義の人に『どういふ目的で淨土へ生れたいか』と聞きますると『極樂淨土はまあ金銀でできた御殿の中で立派な庭があり、珍らしい鳥や美しい花があつて、腹が減つた頃には七珍方丈所が百味の御馳走が山の如く出るから、是非來世はさういふ結構づくめの處へ生れて安樂にくらし、榮耀の限りを盡してみたいからです』と、

随分蟲のよいことを言ふものであります。之も一つの迷見妄想で在る。然らば往生、又佛教の眞意義は抑も何であらうか。

佛教の目的、往生の眞意は道の爲めに盡すといふにある、古歌に

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふゆるゑに惑ひぬるかな

親が子供を世話するのは人前があるからとか、義理があるからとか、そんな水臭い了見で面倒がみられたものでない。心から、心の奥底から可愛いからこそ、自分の身を忘れて迄子供を庇保ふのである。子供が丈夫に育つて立派なものになれば、それが母親には極樂である。親は子供の爲めに生きて居るのである。

佛親の心と

昔からの忠臣義士、彼等が身命を賭して國家のため君主のため、百難千難萬難を冒して尙顧みず、あらゆる全力を振うて働くのは國家が大切、君主大切との誠心誠意があるに基づくからである。

家を去り妻子に別れ、一笠一杖飄々として雲山水涯を友とし、而も機に觸れ縁に遇ひて衆生化度をする僧侶は、行住坐臥宗教を大切、教法大切として居るから是に不惜身命の勇氣を以て大業を成ずるに至るのである。之れ即ち道を愛し道の爲めに一生を捧げるものである。

薩摩の國では昔妙な風があつた。其れは多くの寺々の住持となるものは薩摩の人に限る、どんな偉い名僧智識でも、他國の者ならば決して住持になれなかつたのは島津侯が命じた所で、之は武士でも僧侶で

も自分の領内から英傑俊才を引き立てんと考へてあつたらしい。諸鹿兒島の城下を去ると七里程の在處に福泉寺といふ鳥津侯の菩提寺が在つた。只今では至つて微々たるものであるが、其の昔は領主の勢力で大したもの、従つてこの寺の住持もなかく大したもので、この住持になるものは士族出、即ち武家の出家したものでなくてはならぬといふのであつた。處で領内、久志良村に久四郎といふ農家の小供、出家して頗ぶる聰明博識、加ふるに品行端嚴で、所謂學徳兼備の名僧として推重され、福泉寺住職となることになつた。生れは農家であるが、まあ規則だからといふので武家の小供になつて、出家したといふ、只今の戸籍上の手續を濟ませ愈々住職の披露、之を晋山式と云ひますが

人の出世  
を嫉む南  
林

この式を執り行ふことになりました。この晋山式には本堂須彌壇の上の佛像を片付けて新任住職がこの上に坐して、參堂の僧侶と問答に及ぶのである。住職が問答に負ければ須彌壇から引ずり落されるのは勿論、随分外聞の悪い話で、これが、禪家の大試験場である。然るに同國南林寺の住持がこの由を聞きて、非常に羨んだはよいが、嫉妬を起して、土百姓の伴が領主の菩提寺に入ると又怪しからぬ、晋山式に一番耻をかゝせてやらうと、悪い了見で早速領主鳥津侯にお目にかゝり『彼の福泉寺新住職無三なるものは實は百姓の伴久四郎と申す者、かゝる下賤の者が君侯御先祖累代を祀つた大寺に入は甚だ心得ませぬ』と申し上げた。鳥津侯は大量の方『併し無三は當國一の名僧、